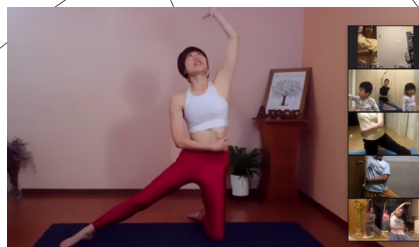
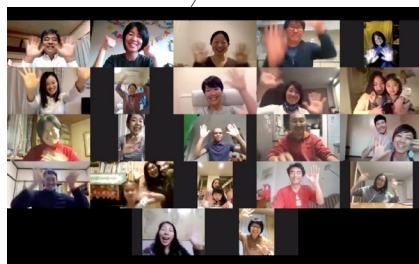


p.2 1



p.24 2



禍
(わざわい)が
世界
にもたらす

Fraternity (友愛)の
和

ブクリあんさん通信 92

2020年6月発行



- 1 折鶴とアフリカンアートのコラボレーション (モンチアズール)
- 2 オンラインで歌をとどけるおきな歌プロジェクト
- 3 オンラインヨガでチャリティーイベント

p.31 3

毎年3月に行っていたCRI総会ですが、
今年はコロナウィルス感染拡大に伴い
3月での実現が叶いませんでした。
あらためて総会を今夏、オンラインで
実施する予定にしております。
つきましては、昨年度の会計報告・活動報告、
今年度の予算・活動予定ならびに
改選予定の運営委員の紹介を今通信で
掲載していますが、正式には総会で
決定・みなさまからの承認をいただきたいと
思います。どうぞご了承ください。

**世界各地のコロナ禍の現状を
報告していただきます。**

- P.2 小貫 大輔 コロナをめぐるモンチアズールの現状 / コロナとWaldorf-UNESCO ネットワーク / コロナと友愛と血洗いと
- P.5 柿内 亜里紗 ボランティアとコロナによる緊急避難
- P.6 神戸 保 パンデミック下のサンパウロとシュタイナー学校の様子
- P.7 青山 蓉香 コロナ禍 サンパウロでは
- P.8 西原 里依 コロナとシュタイナー学校とデジタルテクノロジー
- P.12 安藤 まさ 桜が開き、国境閉じる
- P.15 大橋 千妃呂 日常の景色が変わった、ドイツより
- P.16 吉良 創 今、コロナ禍の中で保育園では
- P.17 藤原 葉子 コロナ禍の中でのグッド・デス、勇気を出して「在宅で過ごす」
- P.18 由良 九里香 禍転じて……保育園の現場より
- P.20 阿部すみれ コロナと大地と子どもたち
- P.21 改選予定の運営委員自己紹介と近況報告
- P.28 2019年度 事業報告案
- P.30 2020年度 事業計画案
- P.32 2019年度 収支報告案
- P.34 2020年度 予算案
- P.35 青山 蓉香 モンチアズールの助産所カーザ・アンジェラでの出産レポート
- P.40 大谷 未来 はじまりのはじまり。
- P.42 倉内 ひかり モンチアズールでの経験
- P.44 橋口 博幸 佐々木神父の活動と竹
- P.48 会員の募集

発行 CRI・チルドレンズ・リソース・インターナショナル
代表 川原 翼
運営委員 青山 蓉香・阿部すみれ・安藤将・大嶋敦志・大谷 未来・
小貫 大輔・西原 里依・星 久美子 デザイン 橋口 博幸
住所 259-1292 神奈川県平塚市北金目4-11 東海大学国際学科小貫大輔研究室
Fax. 0463-50-2407 東海大学国際学科小貫大輔研究室
E-mail. criinfo@cribrasil.org
CRI- Children's Resources International (子ども「スペイン語で」子育て)の意

コロナをめぐる モンチアズールの現状

先日（二〇二〇年五月二十二日）、ブラジルはとうとう新型コロナウイルス感染者の数でロシアを抜き、アメリカに次ぐ世界第二位の国となってしまいました。一日に二十万人の感染者が報告され、毎日千人が亡くなっています。

ブラジルの、そして世界のメディアの論調は、大統領自身がそのシナリオを作ったことを訴えています。コロナのことを「ちょっとした風邪程度」と言い続け、保健大臣が外出規制を支持すると解任する（四月以来二人も！）事態となっています。大統領が問題なのは間違いありませんが、慢性的な貧富の格差、特に国民の六％が居住するという都市部のファヴェーラ（貧民窟）の状況も急速なコロナ拡大の大きな要因となっています。

コロナウイルスの影響で、現在、モンチアズールの教育部門の活動はすべて止まっています。毎日千人ほどの子どもたちが通ってきていたのですが、小学校も保育園も学童保育所も音楽学校も職業訓練施設も開く

ことができません。外国人ボランティアも三月末までに全員帰国しました。

その一方で、公衆衛生部門はてんでこ舞いの忙しさです。

ブラジルには「ファミリーヘルス」という保健医療の制度があります。予防と早期対応を行う第一次医療に力を入れるもので、病院で患者を治療する第二次医療や、専門病院で高度の医療を行う第三次医療とは異なるシステムです。医師と看護師、准看に加えて四〜五人ほどの保健指導員（ヘルスエージェント）でチームを組み、家庭訪問を中心とした保健活動を行い、それぞれがおよそ千家族（五千人）ほどの住む地域をカバーします。

モンチアズールは、サンパウロ市の委託を受けてファミリーヘルスを実施する公益市民団体の一つとなっています。千六百人ほどのスタッフを雇って、地域住民約三十万人の第一次医療を担っています。ファミリーヘルスは、そもそも病気が生まれな

ウテさんから

この鶴とアフリカの
コラボレーションを
みてください！
コロナ禍で必死に働く
モンチアズール保健担当
職員 1,600 人のために、
私たちの学校の先生たちが
3,000 もの「折り鶴」を
作りました。
「つる」は日本の希望の
シンボルですね。



いように、あるいはひどくならないようにという活動です。しかし、突然の緊急事態下、ファミリーヘルスのスタッフは、病気そのもののとの闘いの最前線に立たされることになりました。

ファヴェーラでは、ステイホームと言われても、今日収入が絶えたら明日から食べ物に困るといふ家庭も多くあります。狭くてジメジメしたバラック小屋で大勢の家族が暮らす中、外出自粛は現実味がありません。感染者が出て自宅で療養することになったら、家族や近隣住民への感染をどうやって防ぐことができるのでしょうか。

ファミリーヘルスのスタッフは手一杯で

す。しかも地域の公立病院も崩壊寸前で、モンチアズールの看護師たちは、ほとんどん病院の応援に駆り出されています。「今日病院に働きに行つて、明日は家に帰れないかもしれない」と不安になるような現状だそうです。実際、これまでにモンチアズールのファミリーヘルスチームの中から六十二人の感染者が出ています（五月二十二日現在）。

そんな中、モンチアズールの友人たちから毎日送られてくるメッセージは、「ソリダリティ（連帯）」のメッセージでいっぱいです。今日は貧しい家庭にこれだけお弁当を届けた、冬がそこまで近づいているから今日はこれだけ毛布を届けた（サンパウロの冬は寒い！）という写真が届きます。ファミリーヘルスのチームを応援する「千羽鶴」も折っているそうです。特効薬もワクチンもないコロナとの闘いで、人々はかえって心が高揚しているようにも思えます。

三十年も前に、やはり特効薬もワクチンもなかったエイズと闘う際にも、ブラジルの社会は「連帯」の言葉を高く掲げました。あの当時の高揚感を思い出させられます。私には、二十七歳のときのその「原体験」から学んだことがあります。ウィルスとの闘いが、社会に「連帯」をもたらす。別の言い方をすると、「連帯」なしにウィルスとの闘いに勝つことはできない、という確信です。

コロナとWaldorf-UNESCO ネットワーク

二〇一八年の復活祭の週に「社会イニシアティブ」世界フォーラムを開いたとき、それからちょうど二年後にこのような事態が訪れているとは誰が想像したでしょうか。いや、昨年の十二月にエジプトで開かれた「世界フォーラム」で UNESCO と協働するシュタイナー学校のネットワークを立ち上げたとき、そのわずか三ヶ月後にこれらの学校のほとんどが学校閉鎖になっているなんて……。

動きを止めていました。

その動きを、先日、五月三十一日に再開することになりました。その日はペンテコステ（聖霊降臨祭）の日。復活後に昇天していったイエスを心に、集まって祈っていた信徒たちの上に聖霊が降り、一人一人が直接神様と繋がり、自分の言葉で神の世界のことを語ることができるようになった（しかも、突然世界各地の言葉で語れるようになった）という日です。

今年の一月には、私たちが Waldorf-UNESCO Network と名付けたグループへの参加を促す手紙を世界中のシュタイナー系ユネスコスクールに発送していました。その後、世界中の学校がコロナの問題に巻き込まれたのは、ドイツの学校や「シュタイナー教育友の会」などから少しずつ返事が到着し始めた矢先のことでした。急転直下の事態に一寸先の未来のことがわからなくなつて、しばらくはこのネットワークの

日本では緊急事態宣言が解除され、おそろるおそろるあちこちの学校が再開され始めています。他方ブラジルでは、毎日の新規感染者の報告数が二万人台に達するなど、まだまだ先が見えません。半年前に連絡を取り合った学校は、今どうしているのだろうか。遠隔授業をすることになってどのように対応した（対応している）のだらう……。それぞれの状況をシェアしあうことができたなら

コロナと友愛と皿洗いと

と思い、新しくメーリングリストを立ち上げて、メンバー校の人たちに連絡を取ってみることにしました。こんな大変なときに余計な面倒をかけるようで躊躇されたのですが、こんなときだからこそ世界への思いを同じくする学校と繋がりを確認したい、という思いもあります。

まだメールを送ったばかりで、返事を待っているところです。メンバーたちの様子がわかるようになったら、ホームページを立ち上げて紹介しようとも計画しています。まだ、「建設中」ではありますが、“waldorf-unesco.org”というアドレスになる予定です。夏の開設を目指しています。八月頃になったら、ぜひ一度確認してみてください。

ニューヨークで暮らしていた次女が、コロナで仕事を失い日本に帰ってきました。おかげで、我が家には四人の大人と一人の子どもが一緒に暮らすことになりました。にぎやかでとても楽しいのですが、大人同士の共同生活には工夫も必要です。そういったテーマの一つが「食器洗い」。

誰が食器を洗うのか、ということですが、これは、「自由」な意志に任せていてもうまくいかない。でも「平等」の原則でルールを決めても、実はうまくいかない、どころか、嫌な感じになってしまう。食器洗いの仕組みに一番そぐうのは、実は「友愛=fraternity」なんだと、妙に納得している毎日です。

「自由」とは、「家族はみんなそれぞれ違う人間」であることに対応する原理。

「平等」とは、「家族はみんな同じ人間」であることに対応する原理。

でも「家族の台所は一つ、同じ屋根の下で暮らす人間同士、みんな運命共同体」であることに対応する原理は、上のどちらかという

よりも、第三の原理「友愛」なんです。

「気が向いて、忘れなかったら」というのは自由原理の皿洗い論。

「料理してない人が」とか、「自分のお皿は自分で」というのは平等原理の皿洗い論。

でも、食器を洗うのは家族と台所への「愛」があるからなんです。それが友愛原理の皿洗い論です。

地球環境の問題もそう、難民危機への答えもそう、そして新型コロナウイルス対策も、みんな「地球は一つ、人類は運命共同体」ということに関することなので、「友愛」から導き出される答えが必要なんです。アフターコロナの世界は、自由主義でもなく、社会主義でもなく、友愛主義の時代にならないと。自由と平等の発想しかない、台所はすぐに汚い皿でいっぱいになってしまします。同じように、友愛なくしては、地球環境も破壊されるままになり、難民の押し付け合いが続く、感染症対策も経済対策もみんな中途半端に終わってしまうことと思います。

ボランテアと コロナによる緊急避難

私は二〇一八年の夏から夫の仕事の都合でサンパウロに滞在しています。二〇一九年の四月からモンチアズールの学童保育CCA(Centro para Crianças e Adolescentes)でボランテアを始めました。始めたきっかけはただ子どもが好きだからという理由と、ブラジルのことをもっと知りたいという気持ちからでした。私が過ごしているのは六、七歳のクラスで、毎日三十人ほどの子ども達と一緒に歌を歌ったり絵を描いたりして過ごしています。子ども達は一人一人みんな個性的で感受性が強く、いつも子ども達からたくさんの幸せと刺激をもらっています。四六時中小さな揉め事が起こるので、クラスではできるだけ悲しんだり落ち込んだりした子どもに寄り添い、孤立しそうな子どもがみんなの輪の中に入って遊びやすいような環境作りを心がけています。

そんな楽しい毎日を送っていた私でした

が、サンパウロ市の学校が休校になるとともにモンチアズールの施設も閉鎖することになり、本格的に閉鎖された三月十八日までの間は少人数の子どもだけが学童に来ていました。私が来たことに気づき走ってきて抱きつこうとする子ども達に、ソーシャルディスタンスを取るように言わなければいけないことが辛かったです。ロックダウン後のサンパウロの街は急に雰囲気が変わり、人通りも車通りも一気に少なくなりました。

私も二週間ほど自宅待機をしていましたが、夫の会社の指示で日本に一時帰国する事になりました。帰国が決まってからも予約していた便が欠航になったり、日本への入国規制の影響で乗れなくなったりと紆余曲折の末やっと帰ることができました。空港に着いてから検疫所でPCR検査を受け入国審査を通る頃には九時間が過ぎていて、みんなヘトヘトになっていました。その後PCR検査

の結果が出るまで政府が用意してくれたホテルで待機し、陰性の結果が出てから別のホテルで二週間待機してからやっと関西の自宅に戻る事ができました。突然の帰国指示で必要最低限の荷物だけを詰めて、誰にも別れも告げることができないまま帰って来てしまったので、とにかく一日でも早く元の生活に戻る日を願っています。

パンデミック下のサンパウロと シユタイナー学校の様子

ブラジルは欧州諸国より少しあとの二月末に最初の感染者が報告されました。サンパウロ市内でした。うちの次男はチエテのバスターミナル（街中心部より北に位置）よりまだ北にあるフランシスコ・デ・アシスというシユタイナー学校の高校生ですが、三月十六日に休校になり、今も続いています。当時の感染者数は二〇〇人強でした。

今日、五月十一日、感染者十七万人、死者一万一千人（ブラジルは感染テストキットが圧倒的に不足しているので、イギリスの研究機関は四〇〇万人と報告しています）。多くの州では病床が不足し、医療崩壊を迎えているにもかかわらず、グラフはまだ右肩上がりです。一方で、サンパウロ市の自主隔離率は五〇％以下のレベルで、市役所は今日から二日に一度の自動車乗り入れ規制を始めました。マスク着用義務と併せて、罰金で従わせる措置です。

学校に通えなくなつて二ヶ月になろうとしています。当初からネットで遠隔授業をし

ています。先生たちががんばって、体育やオイリュトミーの授業もあるようです。しかし、これは私立の話であつて、大半の児童生徒が通う公立の学校ではとても同じようにはいきません。子供たちの教育は深刻な問題です。

言うのがとても辛いですが、ブラジルの対応は芳しいとは言えません。しかし、ブラジルが今苦戦している問題は、すべてもともと抱えていたことばかりのようです。格差、不平等、科学技術の軽視、迷走する政府（頑迷で不適格なリーダー）……新型コロナウイルスはリトマス紙のようにこれらを更に色鮮やかに国民に示しているようです。

ご存知の通り、ブラジルはもともと行政や公共サービスに対する期待レベルが低く、その分個人や市民社会がエンパワーメントされた社会だと思っています。コロナのピンチでもその力が発揮されていることは毎日のように見て、感じるができます。しかし一方で、

その行政への不服従や自由奔放で縛られることを嫌う国民性が、自主隔離を難しくしていることも事実です。

いずれにせよ、五月〜六月が山になりそうです。心強く、ブラジルのポジティブさでチャレンジしないといけません。

コロナ禍 サンパウロでは

貧富の差が大きいブラジルでは、新型コロナウイルスはヨーロッパへ旅行してきた富裕層の感染から始まりました。三月半ば頃から

は学校、幼稚園、保育園が一気に閉鎖され、二十四日には外出禁止令が出て、医療、スーパー、薬局、レストラン（宅配のみ）など生活に必須のサービスを除く全てがストップしました。モンチアズールでも、学童や保育園などのサービスが閉鎖され、職員のほとんどが現在是在宅ワークをしているそうです。その後、外出禁止令は二回延長され、現時点では五月末までの延長が決まっています。

富裕層の感染からスタートしたコロナの流行ですが、富裕層の家庭に出入りするお手伝いさんなどを通してじりじりと貧困層にも広がり、サンパウロでは病院のICUに空きのない地域が始めています。また、外出禁止になったため、レストランや路上販売など様々な仕事ができなくなり、特に貧困地域では日々の食事にも困る家庭がたくさん出てきています。このような人々を助けるため、SNS上で寄付を募り食料など生活必

需品を配布する、保険のない人たちに無料で遠隔医療サービスを提供するなど様々な市民イニシアティブが生まれています。

同時に、政治的混乱も起きています。保健大臣の出した緊急事態宣言を、ボルソナロ大統領自らが不遵守。コロナウイルスをただの風邪と呼び、国民に外に出て経済活動をするように繰り返し発言。街に出て人々とハグやキスをかわしている様子が報道されました。幸いブラジルは州政府が持つ権限が強く、サンパウロは州知事の判断によって感染拡大を抑えられている状況ですが、外出禁止を遵守しない人が多いため、状況が改善されなければ都市封鎖になる可能性もあるようです。

私は夫と三ヶ月になる息子とサンパウロ市内に住んでいます。私と息子は家から出るのは毎月の予防接種と検診のみで、スーパーへの買い物は夫にしています。同じアパートでも感染者が出たので、エレベーターに乗るときは緊張しますが、それ以外は今のところ平和に生活しています。外出禁止で家

から出られないのは大変ですが、大渋滞がなくなったため大気汚染が減り、窓から入ってくる外の空気はまるで八ヶ岳のようにきれいになりました。また、ダイナミックな夕焼けや今まで見えなかった山々が高層マンション群の先に見えるなどプラスの変化も起きています。



コロナとシユタイナー学校と デジタルテクノロジー

ゴースタウン

ブラジル・クリチバ市は、サンパウロより飛行機で一時間ほどの南部の街です。三月、すでにサンパウロでは新型コロナウイルスの感染が広がりつつあったものの、感染者の多くはヨーロッパ帰りで、自分事としての切迫感はありませんでした。いつものように穏やかな時間が流れていました。

事態が急変したのは三月十六日。「公立、並びに私立学校は休校とする」との知事令が夕方に出されるやいなや、娘たちが通うシユタイナー学校は早々に閉まってしまいました。

スーパー、薬局など生活に必要なお店以外はすべて閉鎖、街のセンター街は路上生活者以外誰もいないという、ゴースタウンのようないさぎに。いそぎんちゃくか、はたまた二枚貝がヒュツと身を翻し堅く口を閉じるように、クリチバの人の多くがかたくなに家に閉じこもりました。

デジタルテクノロジーへの警鐘

市内のインターナショナルスクールでは、家庭でのオンライン授業に切り替えられ、公立の学校でもビデオ学習ができるように、市が授業を配信し始めました。

これまで、シユタイナー学校は、子どもの成長過程におけるデジタルテクノロジーの使用に慎重な姿勢をとってきました。保護者会があると、「テレビ、パソコン、携帯などからはなるべく距離を置きましょう」と特に就学前・小学低学年のクラスでは重要なトピックで、デジタルテクノロジーが小さな子どもにもたらす影響に警鐘を鳴らしてきました。

しかし、事態は休校・外出自粛生活に突入。早速、小学四年生の娘には Google Classroom というアプリを使って毎日課題が出されることになりました。

先生から「子どもにスクリーンは見せないように」という指示が出されたので、親の携帯に送られてきた課題をプリントアウトするか、手書きで写し取って子どもに渡すことに。

新しい單元には進めないで、もっぱら復習になります。もしくは、筆記体などの反復練習。できた課題を親が写真に撮って、アプリ上で提出、完了。大人はデジタルテクノロジーを使うけれど、子どもはアナログに徹する仕組みです。子どもをデジタル世界から守りつつ、かつ自粛生活でも学習活動が続けたいという試みのように思いました。

心と心の交流・つながり

このように一ヶ月が過ぎ、さらに一ヶ月の延長が決まり、そしてまさかの三ヶ月の休校延長が決まった時、保護者の SNS グループでは「インターネットをなぜもつと活用しない」「オンライン授業、もしくは定期的にオンラインで子ども達が顔を合わせる機会が必要だ」という意見が出始めました。

学校からはあらためて、「子ども達はその成長過程において、バーチャルな世界に親しむ前に現実世界をきちんと経験するべきであり、デジタルテクノロジーは子ども達の神経

の発達において健康的なものではありません。この機会に子ども達がデジタルツールを有用なものとして、その使用を常習化してしまふことも懸念されます。それゆえ、教師にとってデジタルツールを中心とした教育プログラムを選択するというのは容易なことではなく、どうかクラスの子ども達をよく知った教師達の判断にご理解いただき、尊重していただくよう……」という書面が届きました。

そして初めて開かれた四年生のネットを通じてのオンライン保護者会。ほとんどの家庭で共通していたのは、子ども達の心離れでした。いつ学校に戻るのか分からない不安の中、唯一の学校とのつながりである課題に意味が見いだせず、泣きながら課題をやっているという子も……。

実際、担任の先生はいつも創意工夫をこらした課題を、美しい筆記体で手紙にして送ってくれていました。(残念ながら娘はそれを見ないので、私が先生のモノマネをしながら、いつも読んでいた……)しかし残念ながら、それだけでは教室内でいつも先生や友達とかわされていた、心と心の交流・つながりというものが得られないのです。

心が伴わないところには、学びも育たず、課題がただのワークとなっていたことが子ども達に負担となっていたのしかかっていました。うちの娘にいたっては、ポルトガル語も忘れ

かけているし、あんなに好きだった手仕事の授業で作っていた作品もすっかり埃をかぶっていました。彼女にとって、友達や先生と輪になって歌い、しゃべり、笑い、手を動かすということ自体が手仕事という授業だったのだとあらためて感じました。

子ども達に最も大切なことは何か

今までの常識を覆したコロナ禍。最初のシユタイナー学校が創設されて百周年の翌年にこのコロナ禍が起こったことは偶然ではないような気がします。正直、先生はオンラインの必要性を認めながらも、その使用を極力減らしたいと考えているし、オンライン授業に肯定的な保護者も否定的な保護者もいます。

コロナ禍が始まり、大人の社会は急激にデジタル化しましたが、子ども達に同じようにすることが果たして正解なのか、その前に大事なことは何なのか。コロナ禍で抱えた思わぬジレンマですが、クラスの担任、保護者がある中で、子ども達に最も大切なことは何かと真剣に考え、確認し合えた時間は、たとえパソコンの画面上であつてもとても温かく、胸が熱くなりました。

保護者会後、とりあえず、毎日の課題の指示が書面から先生が吹き込む音声になりました。そして毎日、先生のお話の朗読も届きま

す。これだけでも双方の距離がグッと縮まったような気がします。そして開かれたクラスのオンラインビデオ集会には(子ども達による近況報告)子ども達はみな大喜びでした。

これはブラジルのある四年生のクラスの例にすぎません。これまでデジタルテクノロジーとの関わり方に慎重な姿勢をとってきたシユタイナー学校ですが、頭だけでなく、心や身体、魂にも働きかけて教育をおこなってきたからこそ、子どもの顔が見られ、息づかいさえも感じることができるオンラインで対面する活動が必要なのだという方向へ、たどり着いたように思います。

最後に、先生から送っていただいたブラジルの原住民(グアラニー族)の創世記が今の世界の状況と相まって、私たちへの重要なメッセージのように思えたので、その一部をご紹介します。

ブラジルの原住民 グアラーニ族の 創世記

前半のあらすじ

その昔、ニヤマンドウと呼ばれる太古の呼吸の中で光が生まれ、その光の中からトパンが生まれた。トパンは母なる大地をつくり、星々をつくった。川、湖、泉、森、砂漠、平原をつくり、その仕事の続きを任せるために最初のヒトのようなもの、ニヤンデルブスーをつくった。ニヤンデルブスーは鳥、魚、動物などをつくり、最初の女性、クニヤタイをつくった。

クニヤタイは森の木々からひとつずつ種をとってきて、ひょうたんの中に入れふたをしました。ひょうたんを振り、歌をうたうと種は子どもになりました。この種は赤、黄、黒、白色をしていて、土からできた果実の種であつたり、風で運ばれてきたものであつたり、まだその中に火の力や水の力を宿していたものもありました。

四人のヒトが作られました。みな、同じ自然から生まれた種でした。ニヤンデルブスーとクニヤタイは、子ども達に天と地の知恵を教えました。そして世界はどんどん大きくなり、多くの人が住むようになりました。

ある日、ニヤンデルブスーは疲れ、歩くことができなくなってしまうましたが、愛しい種の子ども達から離れなくなかったので、太陽になりました。



クニヤタイは月になり、明るい夜にも暗い夜にも、すべての子孫たちに寄り添うようになりました。

四人の子どもたち、ニヤンデリケイ、ジュルアー、ユバー、カンベは、太陽と月になった父母がこれまでできてきたように、彼らの村を守っていました。

ある夕方、ジュルアーがうつとりと夕陽を眺めていると、ふと、のちに「向こう側の世界」と呼ばれるようになった、この神秘的な色の方に行ってみたくなくなりました。そうするには川を渡らなければならず、心細く思ったジュルアーは、村のみなに呼びかけ、そのうちの何人かとともに川を渡り、夕陽の中に消えていきました。

ユバーはカヌーにのっていたとき、そのとき見ていた朝陽よりも、もっと他の世界を見てみたくなり、仲間を集め、太陽の方へ向かいました。

カンベは道を作ることが好きで、村のために仲間と大切な道々を作っていました。ある道は川へ、ある道は山へ、ある道は森の中へ、そして村の周りにはさまざまな道がはしっていました。ある日、カンベは遠くむこうの

ブラジル / クリチバ

方まで道をひろげてみたくなり、仲間を募り、そして去って行きました。

一番年上のニャンデリケイは仲間とともに村に残り、父母の教えを守っていました。土を形作って食器や工芸品を作り、家々や集落を建てていました。

ある日、ニャンデリケイの妻、チジャリがある夢を見たと言いにやってきました。チジャリは夢の中でひどく苦しんだおかげで、とても不安げでした。しかし同時に、世界に人類の春がやってくるという救いのお告げもあったということです。

その夢からずいぶんと時がたち、ジュルアーが仲間と村に戻ってきました。鏡、ライフル、拳銃、大砲、爆弾、斧、刀など、自分たちで創り出したものも持ち帰ってきました。とて



も長い時間がたっていたので、ジュルアーはもはやその村が自分の出身の村で、そこに住んでいた人々が自分の兄弟だということを忘れていました。カンベーも、村を出て行った時よりも多くの者を連れて帰ってきました。しかし、そこが自分たちがいた場所だということ覚えてはいませんでした。ユバーは空から多くの仲間たちと空飛ぶ機械に乗って帰ってきましたが、やはり、そこが自分たちの生まれ場所だとは思いませんでした。一番若い弟が一番年上の兄を矢でうち、戦争が始まりました。空では太陽と月が会い、抱きしめ合っておおいに泣き、涙が雨粒となって地面におちました。そのとき、トパンが雷鳴を鳴り響かせて言いました。

「おまえたちはひとつの大地に根をはったひとつの森から生まれ、同じ空の息吹、同じ空の光をうけて育った種だ。争うためにもう一度めぐりあったのではない。培ってきた経験、人生、知恵を分かち合うために、愛し合うために、もう一度めぐりあったのだ。赤い種の知恵、黄色の種の知恵、黒い種の知恵、白い種の知恵が合わさったとき、新しいヒトが生まれるだろう。それは金色のヒトである。四つの種の団結から新しいヒトが生まれるだろう。」

トパンが言い終えた時、雨がやみました。しっかりと濡れた世界からは、新しい時代の香りが匂い立っていました。

一番上の兄が妻に言いました。

「この夢をこの地に植えよう。いつか花咲く日まで」

太陽は金色に輝く東方からやってきて、村で生まれました。春はもうそこまできていくことでしょう。

写真について

2007年、モンチアズールボランティアだった時に訪れたアラポチ研究所。同研究所は、ウテ・クレーマーさんやモンチアズール・コミュニティ協会などと協力しながら、ブラジル先住民の知恵を集約し普及する活動をしている。この創世記もアラポチの力カベラさんが口頭伝承だったものを文章化した。

桜が開き、国境閉じる

最後の桜

三月十三日金曜日、最後の普通の日。

翌週から世界の景色が変わっていくとは夢にも思わず、子どもの学校帰りにピンク色の吹き抜けになった通りで花見をしました。その日は暖かい桜日和で、一斉に咲くことがないスイスの桜でも綺麗に咲き誇り、クロワッサンとジュースでの花見です。子どもは食べることに夢中で花より団子。「今日が最後の桜になるかも……」と花見を促したその言葉が現実になりました。二日後の日曜日に学校からメールで翌日からの休校通達。片道自転車車で三十分かかる学校にはそれ以降行く事



最初で最後だったスイスの桜並木

はありませんでした。

その後、日を追うごとに規則が厳しくなり、遠くの出来事として楽観的だったスイス市民に緊張の波が広がっていききました。村の商店街は閑散とし、時々出会う人と道ですれ違う際、緊張が走るのが伝わります。

犬が一番疲れている

スイスの規制はまだ緩く、隣国のフランスやイタリアの外出禁止は大変のようです。イタリア・ミラノ近郊の友人からメールで「家から一步も出れないことで死にそうだ」とメールが来ました。噂で「イタリアでは今犬が一番疲れている」そうです。犬の散歩だけは外出しても罰則はないので近所の人々が代わる代わる同じ犬を連れ出して外出すると言う話です。

規制処置も言語によって違いが出ます。スイスは独仏伊ロマンシュ語と四つの言語圏があるため、仏・伊語圏は同じスイス国内にも関わらずフランス・イタリア両国の規制に影響された厳しめの政策を行なっています。



スーパーへの入場制限のため並ぶ客

商店の閉鎖と国境封鎖

私の住むドイツ語圏地域の規制の手始めは商店閉鎖からでした。医療・食品店以外全部閉まりました。そしてすぐ映画館、美術館、コンサート等も閉鎖対象に広がりました。五人以上の集まりは罰金一人一万円。その結果、私たちにも影響が出ました。毎年行うモンチアブールのフェンドレイズ・イベントが中止になりました。

スイス

私たちが桜を見ていた日に、遅きに失した感のあるイタリア国境封鎖が行われていました。イタリア国内の感染爆発があつてからかなり遅れての決定です。それから二週間後にドイツ・フランス（EU諸国）の国境が閉まりました。この国境封鎖処置はEU諸国とスイスにとってかなり神経を使う問題だったようです。イタリアで感染爆発があつてからの市民感覚と国の決断にはかなり時差がありました。

その理由は国境封鎖とは一大事だということでした。欧州連合は第二次世界戦禍の反省から生まれた共同体であり、経済と人の結びつきとして国境通過チェックの廃止が進みま



コロナによりスイス～フランスの国境閉鎖

した。それゆえ国境封鎖の判断はEU共同体としてとても難しい判断だったようです。日本で言うなら都道府県境が閉まるのに近いことでしょう。地域経済も隣国と一体になって、毎日の越境労働者なくして成り立ちません。たくさんの医師や看護師も越境労働者の職業の一つです。スイスは就労証明書保持者の国境通過を許可しましたが、それによって国境は渋滞が起きました。

商店の閉鎖と国境封鎖で、独仏国境都市バーゼルは市内から人がいなくなりました。毎日が日曜日です（多くのEU都市は日曜日はほぼ全ての商業施設が閉まります）。国際列車の終着駅ホールは、いつもの混雑とは裏腹に時が止まったように人がなくなりました。全ての



閑散とするバーゼルの目抜き通り

乗降客がほぼいない仏独伊の
国際列車発着地バーゼル SBB 駅

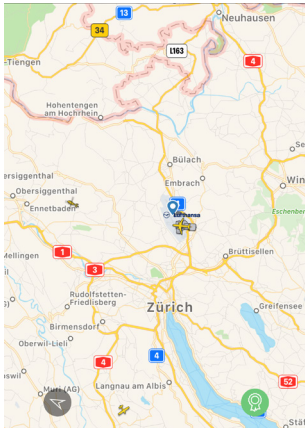


国際列車が運行停止。そしていつもは家の側を離陸態勢に入る飛行機も飛ばなくなりました。スマホのアプリで上空を飛ぶフライト情報を見ると、時々飛んでいる便は荷物輸送の飛行機です。EU圏は都市間のシャトル便がバスの如く飛んでいます。が、ほぼ一切飛ばなくなりました。各大都市の空は普段は空の渋滞がしていましたが今はガラガラで時々飛んでいるのは荷物便。

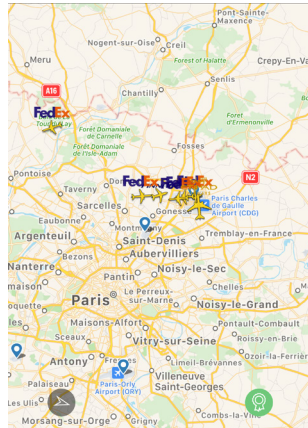
社会改革の必要性

この事実を私たちはしっかりと意識しないといけないと思いました。商店が閉まり、飛行機も飛ばなくなり、国境まで閉まる。今まで多くの市民やNGO、学者が声を枯らして経済活動の抑制を訴えていたのに変化はなく、経済活動の停止など誰もが絶対に出来ない話なのだと思ひ込まれていました。

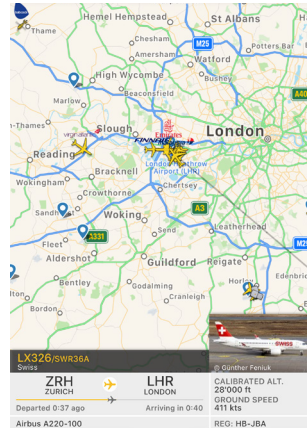
スイス



チューリッヒは飛行ゼロ



パリ近郊はFedex という
貨物便だけ



ロンドン近郊の空に
飛行機が飛んでいない

同じようなこととして3.11東日本大震災の福島原発時を思い出します。それ以前は原子力発電所は電力供給上、止めることは不可能と言われていました。しかし実際にはあの災害の後、日本社会は数年間原発無しで過しました。

原発が、そして経済が止まろうが、私たち

の生活は続きます。人が生きていく基盤と経済活動を別のものとする社会改革が必要です。そのために行政があるのでしよう。

今現在、たった数ヶ月のウィルス禍で沢山の人の生活が成り立たなくなっています。欧州では移民や難民、不法労働者がいて彼らの生活が大打撃を受けています。移民の多くは低賃金労働のため非正規雇用契約で行政のサポート申請を受ける証明が困難です。日本でも大学生がバイトが無くなり学生生活を続けるか悩んでいると話しました。ブラジルのモンチアズールも住民への支援を訴えています。たった数ヶ月の経済停止で人々の生活が成り立っていないというのは、いかに私たちの生活が経済に依存した存在だったかということです。

高校生環境活動家グレッタ・トゥーンベリさんが言うまでも無く、経済活動の方向転換、自国だけではない地球市民的思考の時代がこのウィルス禍によっていよいよ現実的になった気がします。

これが本当のパラダイムシフトなのだと思います。すでにこのパンデミック以前からナショナリズムや極右政党の台頭、ヘイト、引きこもり、鬱、自殺、いじめやブラック企業の問題がありました。これらは全て人々の社会に対する改善要求の叫びなのです。

格差社会の広がり、原発問題、難民の流出、

これらの問題は全て経済活動に起因し、今までの解決の兆しはありませんでした。経済とは社会を効率化して人々の幸せを作るためにあるはずですが、人々はその経済によって振り回されています。経済構造の変革はすでに叫ばれていて、その一つにAI（人工知能）の出現で多くの職業がなくなるとも言われています。そんな中で一つの社会改善策としてベーシックインカム（基本所得保証）導入の可能性もあちらこちらで聞かえてきました。

コロナ禍が社会に何をもたらすのか

黒船到来で開国した日本、世界大戦の戦禍によって生まれた欧州共同体や国連。このコロナ禍が社会に何をもたらすのか、私たちは考えていかないとけないと思います。

同時に今とはにかく、今世界中で経済によって苦しめられている人々に思いを寄せることでしよう。子どもが学生が、経済禍によって苦しんでいるということ。そのことに思いを寄せること、それが次なる社会を創造することは間違いないことと思います。

日常の景色が変わった、ドイツより

五月になりました。新型コロナウイルス対策の接触制限措置がドイツで出されてから、約二ヶ月が経とうとしています。最近になって閉められていたお店の営業が再開したり、博物館や動物園が開いたり、公園で遊べるようになったり、制限が少しずつ緩まってきました。それに合わせて、外に出てくる人の数もだいぶ増えてきました。

私の職場の幼稚園も他の学校や幼稚園のように制限措置が出た頃一度休園になりました。その後、どうしても子どもを預けて仕事をしなければいけない家庭（例えば弁護士や警察官、スーパーマーケットの店員など）の子どもが数人来ているので、職員が順番に幼稚園で保育しています。それ以外は家で仕事をしていきます。散歩などで一日に一度は外に出るようにしています。買い物に行く頻度を減らしたり、公共交通機関の使用をできるだけ控えています。

ドイツでは四月末から、公共交通機関や買い物時にはマスクの着用が義務化されました（口と鼻をおおえばスカーフなどでも可能で

す。ドイツには日常的にマスクをする文化がなく、これまで風邪だろうと花粉症だろうと、町でマスクをしている人を一度も見ることがありませんでした。それでこの前、義務化されてから初めて地下鉄とバスに乗りました。日本だったら何でもない光景でしょうが、そこにいる人全員がマスクをしている姿はとても違和感がありました。みんなマスクをしていて喋りにくいのか、車内はいつもより静かでした。

バスは、制限措置が出てから一度も乗っていませんでした。バスの乗り口は基本的に前の扉からです。乗る時に運転手から切符を買ったり定期を見せたりします。ですが、いつものように前の扉から乗ろうとしたら、オレンジ色の扉故障のシールが貼られています（ドイツの電車や地下鉄は時々扉が故障したまま走っていて、使用できない扉にはこのシールが貼ってあります）。前の扉は使われていないので、他の乗客と同じように、後ろ扉から乗りました。そして、席に座って前方をよく見てみると、運転席と客席の間には透明のビニルシートが一

面に貼ってあって、完全に行き来できないようになっています。乗客にはマスク義務がありますが、運転手にはありません。張り紙には、切符はアプリ、または事前に券売機で買っておくようにと書かれています。このシートは運転手を守る為の対策として貼られているようです。バスの窓から他のバスを見ると、どれも前の扉にはオレンジ色のシールが貼ってあるのがみえました。

最近よくニュースで見かける話題は、今年の夏の休暇はどうなるのか、ということですが、国外に出られるのか、出られないのなら、どんなところに泊まるのか、宿に空きはあるのか、などです。普段ドイツで人と話していると、休暇の話がよく出ます。「次の休暇はどこ行くの？」「休暇どうだった？」「こんな状況でも休暇を気にせずにはられないところろが、とてもドイツらしいなと思ってしまいます。何も気にせず好きな場所へ出かけられる日がまた来ますように……！」

今、コロナ禍の中で保育園では

私が園長をしている社会福祉法人しおん保育園の滝山しおん保育園（東京都東久留米市）では、三月から保護者が園舎内に入らないようにして、朝夕の受け入れと受け渡しは園庭側のテラスで行っています。卒園式、入園式はおこないましたが、参加者を限定して謝恩会や在園児が参加するお祝いの会は中止しました。子どもが使う遊具や、室内のいろいろなものの消毒作業には、かなりの時間を使っています。

四月七日の緊急事態宣言を受けて、東久留米市からは「四月十五日から五月六日までの保育縮小を実施するので、仕事を休んで家にいることが可能な保護者の方は乳幼児の登園をお控えください」との連絡がありました。保育が必要な家庭は「緊急事態措置に基づく保育の縮小期間における保育施設の利用要望書」に保育を必要とする理由と登園日を記入して提出し、申請した日のみ保育園を利用できます。実際には家庭数七十二のうち、要望書を提出したのが二十五家庭で、多い日でも十数人の園児のみの登園となりました。登園

している子どもたちは、だいたいいつも同じ顔ぶれで、通常の九十人と比べてずっと静かな雰囲気の中、落ち着いて楽しく過ごしていますが、それ以外の家庭は登園を自粛し、自宅または、祖父母宅などで過ごしていることになりました。

登園児が少ないので、保育、調理、事務など必要な職員以外は、書類作成、行事に使うものや、おもちゃ作りなど自宅で行える仕事は在宅勤務とし、可能な場合は有給も消化してもらおうようにして保育園内の人の数を減らすようにしています。

毎月発行している園だよりやその他の配布物は郵送し、その際、保育士からは家庭でできるわらべ歌遊びなどを、栄養士は親子でできるレシピなどを紹介するプリントを作り同封しました。シュタイナー園ではないので、家庭の多くではテレビ、ゲーム、YouTubeなどは当たり前でメディア漬けの受身的な生活になってしまっているように、頭や手足を自発的にたくさん動かす活動（手芸、工作、料理、

家の仕事の手伝い、芸術、スポーツ、ボードゲーム、カードゲームなどを子どもたちができるように、家での過ごし方についても、保護者に伝えました。

私個人も土日や祝日の保育園以外のシュタイナー幼児教育やライアー関係の講座などの仕事はほぼすべてキャンセルとなり、家で、いつもは忙しくてできなかったことに取り組むことをしています。そこで感じたのは「時間」が戻ってきたという感覚でした。エンデの「モモ」の「灰色の男たち」に盗まれてしまっていた「時間」が戻ってきたのです。自由に使える「時間」がある時に何をするかに、その人の人間性、精神性が現れます。皮肉にもコロナウイルスによって取り戻すことのできた「時間」を私たちが今どう使うのか。それはアフターコロナの私たちに大きく影響を及ぼすのだと思います。

コロナ禍の中でのグッド・デス、 勇気を出して「在宅で過ごす」

私は、札幌で在宅緩和ケア専門クリニックの医師をしています。札幌は百九〇万都市であり北海道の道庁所在地です。北海道第二の都市、旭川の人口が三三万人であることから、いかに札幌に人口と都市機能が集中しているか、わかっていただけるのではないのでしょうか。ちなみに、札幌の年間降雪量は三五〇〜六〇〇センチであり、冬の訪問診療の大変さは、なかなかのものです。

さて、在宅緩和ケアとは、在宅で行う緩和ケアのことです。緩和ケアとは、病の種類にかかわらず命を脅かされた状態にある患者・家族に、より良いQOL（クオリティ・オブ・ライフ）で過ごしてもらうための医療のことです。なお、医学的には余命六か月未満と予測される状態を終末期と呼び、当院ではがん終末期の方が九五%を占めます。多職種チーム（医師・看護師・理学療法士・薬剤師・ケアマネジャー・ヘルパー・本人・家族・友人）で、良好なコミュニケーションを密にとりながら、それぞれの

プロフェッショナルリズムにおいて適切な時に必要なケアを提供することが質の高い在宅療養（それは往々にして非常に平凡な日々となる）を可能にします。良いチームであればあるほど医師としての私の役割は小さくなり、本人・家族が主役となっていきます。

ここ北海道では、最初の新型コロナウイルス感染者が一月二十八日に発生、計六十六名となった二月二十八日、知事により緊急事態宣言が出されました。実は、緊急事態宣言が出される前から札幌市内のほとんどの病院・介護施設で面会制限がなされていました。面会者がウィルスを持ち込むのを防ぐためです。ホスピス病棟も例外ではなく、当初は最後の数日は家族の面会が許されている病院もありましたが、それも徐々に厳しくなってきました。

そんな中で「最後は家族に囲まれて亡くなりたい」とホスピス病棟や治療病院から退院

してくる患者さんが増えています。当院でも、平時であればトイレ歩行が困難になってくると「家族に迷惑をかけるから」と入院を選ぶ方が三割程度いますが、今は「入院すると二度と家族に会えないから」と在宅で最後まで過ごすことを選ぶ方が非常に多くなってきました。

人は生まれたときからたくさんの手と愛をかけてもらって大きくなるように、死にゆくときにもたくさんの手と愛をかけてもらうことでグッド・デス（よい死）となります。そして、自らの体が思うように動かなくなってきたときには、他者に、家族に身を委ねることが出来る強さ（受援力）が必要です（これは、完全に私見ですが……）。しかし、日本人は往々にして「家族に迷惑をかけたくない」、「他人に迷惑をかけたくない」と言います。実際に、当院の患者さんの入院理由のほとんどが「家族の介護負担」です。

しかしいま、思いがけず、「入院して家族に迷惑をかけずに一人で死んでいくか」、「家で家族に手をかけてもらって皆に囲まれて死んでいくか」の究極の選択を迫られ、患者も家族も建前を捨てて、勇気を出して、「在宅で過ごす」という選択をするようになってきているのです。

これは、新型コロナウイルスからのある種の贈り物なのではないか、と、北の大地の片隅で、一介の在宅緩和ケア医は日々考えているのです。

由良 九里香

保育士

コロナ禍の現状

日本 / 神奈川

禍転じて…… 保育園の現場より

私は横浜市にある小規模保育園で担任を務めています。一〇二歳児、定員十二人の小さな園で、担任二人体制、数人の補助の先生とで保育をしています。緊急事態宣言を受け、保育園の状況はまったく変わりました。

宣言の翌週から、私たちの園では、給食提供をとりやめ、保護者にお弁当持参の願いをし、開所時間も短くしました。これまで小規模保育園の規定通り十一時間開所していましたが、今は長くて八時間限定で保育しています。多くの方が登園自粛にご協力下さり、毎日三〜四人の子どもを、保育士が二〜三人で保育するという環境になりました。

外遊びには、自然が多く、幼い子も身体をたっぷり動かせ、のびのびできる公園を選んで、変わらず出かけています。

これまで、低年齢（三歳以下）の子どもの、長時間にわたる集団保育の心身への負担を時

折感じてきました。大人には労働時間の規制があるのに、子どもが預けられる時間制限がないのは、おかしくないだろうか？と疑問を持っていました。

この状況になり、私たちの園では、今、長時間保育から子どもたちは開放され、ゆったりとした保育環境の中、子どもたちはのびのびと落ち着いて過ごしているのです。

毎日のように「〇〇（ちゃん）いないねえ」とお休みの子どもの名前が上がり、あれ？という表情も読み取れますが、理由を伝えるよりも、その気持ちを受け止めながら、「お家で遊んでいるかな」、「今度来たら、また一緒に遊ぼうね」と希望の言葉で応えるようにしています。

働くお母さんお父さん方にとって、毎日のお弁当作りは大変だろうと心配しましたが、そのお弁当を見てみると、本当に子どものこ

由良 九里香

を思っで愛情込めて作られたことが伝わってきます。子どもたちも喜んでよく食べます！このようなことでもなければ、保育園の子どもたちはそんなお弁当を食べることはなかったかもしれません。

一方、登園自粛されている方にとっては、親子で一緒に過ごす日常が新しく始まったわけです。「長い一日、どのように遊ばせたらよいのだろう」、「お昼寝しなくて…」、「癩癩を起こして落ち着かせるのが大変…」などの声が寄せられます。

そこで、子どもたちとの毎日の過ごし方、野菜の下ごしらえやお掃除など、生活の中で子どもが参加できるお手伝いの仕方、家でも身体を動かせる運動遊びなどをご紹介したり、悩み相談に答え、情報を発信することが、これまで以上に園での大きな役割になっていきます。

これまで学んできたシユタイナー教育には、このようなときに伝えられることが満載です。私の勤める園はシユタイナー保育園ではあります。通う方々はシユタイナー教育を求めて入園されるというよりも、通いやすさなどによって選ばれる方がほとんどです。分かりやすく、普通のことばで伝え、役に立

てて頂けるよう、試んでいます。

大変な中ではありますが、時間はたっぷりある中で、親子で健やかな時を過ごせるよう、様々な提案やアドバイスを伝え、子どもと過ごす日常生活の中に喜びを見つけてもらえたらと願っています。

保育士たちは、子どもたち、そして働きながら子育てをする親御さんのためにできることをしたいと思っています。けれども、保育することは、どうしても感染させてしまうリスクを発生させ、時折不安にかられます。普段であれば心配しない、ちょっとした体調の変化でも、一回一回、保育にあたって大丈夫かどうか、決断せねばなりません。自分が子どもの健康に与える影響の大きさを不安に思いい、はっとするのです。この健康状態に限らず、子どもに与える影響はこれまでもいつも大きなものだったのだと。

これからの長期戦、様々な決断を迫られることでしょう。社会は転換を迫られているように思えてなりません。子育てに関していえば、これまでは働き方、企業の在り方、経済活動に子どもが合わせられてきたことが、これからは子どもの健康な育ちの為に社会が合わせる、という方向に少しずつでも変わるこ

とができたらと。

このコロナウイルスに関連して変更したところ、保育時間の短縮や少人数保育などは、本来そうできたと思うことばかりです。これが、どこまで続けられるのか、行政との狭間で、保護者の希望との間で、園で話し合い、決断していかねばなりません。

禍転じて……となるような方向に社会が転換できるように願いながら、保育園の現場でできることをして、ひとつひとつ進んでいこうと思います。

コロナと大地と子どもたち

ファミリーホーム

ファミリーホームでの子どもたちとの暮らしとコロナについての話を書きます。ファミリーホームは二〇〇九年に児童福祉法改正により「小規模住居型児童養育事業」として始まりました。家庭環境を失った子どもが、家庭の中に迎えられて暮らすおうちです。経験豊かな里親夫婦の家庭もあれば、私たちのホームの様に血の繋がりを持たない大人同士がNPO法人で運営しているものもあります。「NPO法人クロップみのり」(以下クロップ)では、現在年齢様々な六名の子どもたちが自分のおうちとして暮らしています。

休校と引っ越し

二〇二〇年三月に、小学校から高校までが休校となりました。ひな祭りの頃でした。私たちクロップは四月に引っ越しを控えていました。大きなくすのきが昔から守っていた、鎮守の森(神社の奥宮の様な場所)にご縁があり三年の月日をかけ準備を重ねてきたのでした。

新しい土地での仕事

新しい土地での仕事はたくさんありました。コロナにより学校に行かない代わりに、毎日、朝九時から夕方まで子どもたちと職員で作業しました。大地に空気と水を循環させるための炭焼き、炭まき。大地をカバーするためのウッドチップ撒きや地層五センチメートルに水脈を掘って竹や草、枝を入れていく作業。新しいホームの麻炭塗り、赤土と石灰と珊瑚を混ぜたクリームでの壁塗り。三棟の建物を自分たちで一ヶ月かけて塗りました。土を耕して畑を作り、種を植えました。ハーブや木々の植樹。風を読み、風が通る様にカマで草刈り。子どもたちは取ってきたふきで煮物を作ったり、ハーブや野草でブーケや、よもぎのオイルを作ったりしました。

微生物とコロナ

土地整備を教えてくれた「大地の再生」の方はこう言っていました。「地上と地下に風を通す。風通しを良くして循環することで、コロナが好まない表層の環境を作ることができる。」そうしてコンクリートを剥がし、そ

こに穴を開け(プロの方がドリルでコンクリを砕いていきます)へドロ化した灰汁が溜まった大地に水と空気を通しました。

地中では根っこ同士が連携し、水脈が繋がり、大地の呼吸が循環します。その呼吸が波となり、隣の山へ、海へと繋がっていき循環していくそうです。微生物には嫌気性のもの、好気性のものがありますが、どちらが良い悪いではありません。排除することではなく、地球の中でそれぞれが住みやすい環境と、大地の均衡を作ること。排除しなければならぬ悪いものなく、暴れない様な環境を整えてあげることが大切なのだと感じます。

仕事と個性

私たちの身体は炭と土にまみれながら、共に働く心地よさを味わいました。わたしは身体で一緒に感じることの一体感と喜びを感じました。何より嬉しかったことは、このコロナ休み中の仕事を通して、子どもたちの個性に出会ったことです。子どもたちは幼少期の傷つきが深く、それぞれに想像を絶する生きづらさを抱えています。暴

共に生きる

ひとつ屋根の下で暮らすみんなが自粛中外出せずに、この様な体験をしました。こうやってわたしたちが希望を紡いでいくことができたのは、遠くからもサポートしてくれる人たちがいたからです。学校が休みで、人口密度が高く刺激しあってしまう密な家庭環境でも、「大地の再生」から環境を整えることの大切さを学び、棲み分けや刺激しない過ごし方を心がけました。お互いの個性はそれぞれ「違う」ということが、生々しく隣で感じられる毎日でした。(子どもたちは引越しの不安から不安定になり、夜眠れなくなる・赤ちゃん返り・行き場のない思いが爆発……などたくさんありました)

また コロナのお休みで留守番しなければならなかった子、家庭で苦しい思いをしている子たちにとっては地獄の毎日だったのだろうと思うと本当につらく、同時にやっとここへ辿りついた子どもたちの生活も守らなければ

ばという、葛藤と自分の限界を感じました。仲間との出会いやつながりは自分自身の中の安心感と信頼感の源でもあります。(人とつながる上で自分自身とつながっていることを何よりも大切に思っています) この小さいけれど柔らかな呼吸の波を届けられたら。自分自身がそれぞれの個性が尊重されて生き生き暮らせる社会を渴望し、そしてつながりを求めていることに改めて気付かされました。

存在

そうしている間にも、ファミリーホームから自立した子や、児童養護施設を卒業した若者からの相談の連絡が続いていました。「奨学金返済を猶予してもらいたいけど、たくさん書類が必要でできていない。催促の電話が毎日来るのでどうしよう」「アルバイト先が休業で給与の保証がなく、貯金もないので家賃が払えなくなった」非正規労働やアルバイトで生計を立てていて、頼る実家のない若者。真っ先に生活が成り立たなくなってしまう。十万円の給付金がまだだったので、家賃補助や社会福祉協議会の貸付金を使いながら、なんとかやっています。職員は市役所通いと書類作りに走り回っていた一ヶ月でもありました。

乳児院では職員の体温制限（コロナ対策として三十七度以上の体温の人はお休み）を行なった結果、

職員が不足して現場が大変になる、児童養護施設では学校が休みになりストレスを抱えた子どもたちが荒れている、近隣から子どもの声がうるさいと苦情が来ているなどの声を聞きました。福祉の相談窓口もたくさんの人や予約でいっぱいだそうです。

経済が混乱した時に真つ先に立ち行かなくなる人の存在があります。緊急事態宣言が解除されたこれからが正念場だと感じます。疲弊したひとり親家庭や、働くひとり親家庭の学習支援、（ふたり親であっても）育児が困難になってしまった家庭の見守りとサポートや遊び場の提供、緊急時の一時預かりと相談事業を始めようという気持ちで職員の間に芽生えてきています。つい数日前にこの新しいプロジェクトの助成金の応募を完了したところで、どんな家庭に育っても、子ども、親子が安心して一緒に生きられる社会へ。

色

CR1の総会をこの新しい土地で行う予定でしたがコロナのために中止になってしまいました。「私たちが春に目覚めて光を集めていくときどんな色が現れるのだろう」と楽しみにしていた総会でした。

「色は光の受苦であり、所行である。」という言葉があります。光と物質、人が重なり合う影や、グラデーシオンの中に色が生まれる



自分の部屋を塗ろう

ということだと理解しています。今、会えない中でのオンラインでのやりとりや、地球の裏側とのオンラインでのやりとりが可能な時代になりました。相手の存在がある限り、直接会えなくても重なり合い生まれる色がある様に感じられます。

二〇一八年にオリゾンチアズール（モンチアズールのプロジェクトエリアの一つ）で行われた「教育者の集い」で、ブラジルの先住民民族が「過去、未来そして現在は今全てここにあります。」と言っていました。わたしたちの影も、社会的な影も全てが今ここにあるということです。今、全ての葛藤と苦しみと痛みがここにあって、オンライン上で折り重なる人の間にどんな色が生まれているのでしょうか。無限に広がる可能性の空間に、夕陽の沈んだ空に広がる太陽の残像と夜の暗闇のグラデーションを見えています。



みんなのおうち



それぞれの仕事



水脈と子どもたち



黒土の山はぼくらの秘密基地

改選予定の運営委員自己紹介と近況報告

青山 蓉香

Yuka Aoyama

シユタイナー学園九期生。イギリスの大学に留学中、六ヶ月間モンチアズールの保育園にてボランティア。卒業後帰国し、英語教師、翻訳業、通訳として活動。ブラジルは学生時代が最初で最後だと思っていたが、縁あって昨年サンパウロに引越す。今年二月にモンチアズールの助産所で男の子を出産。旅行代理店勤務。現在は育休中。

息子が生まれて一ヶ月も経たないうちに外出禁止になりました。生まれて初めの数ヶ月はどちらにせよ出歩けないので、日々の生活にあまり不自由は感じていません。むしろ、夫が在宅ワークになり家族みんなで過ごせる毎日がありがたく感じています。ブラジルの育児休暇は基本四ヶ月で、私の場合は残り一ヶ月を切りました。コロナウイルスはまだ収まる気配を見せませんが、

仕事に戻るべきか、育児に集中すべきか、それ以前に自分は何がしたいのか、悩んでいます。

去年から未曾有の自然災害に見舞われ（アマゾン熱帯雨林の大規模火災、ミナスジェライス州の大洪水、漂着した石油による海岸汚染など）、さらにコロナウイルスによって社会的不平等が浮き彫りになるブラジル……より良い世界にして未来の子どもたちにバトンタッチしたいです。

阿部 すみれ

Sumire Abe

子どもたちの心のケア、社会的養護を担う児童福祉団体に勤務。子どもの時からヤノマミの人々とアマゾン河イルカに会いにく日を長年夢見てきた。二〇一八年から一年間モンチアズールに娘（当時五歳）と滞在。（滞在記は通信九〇・九一号に掲載）

福祉・医療・教育など社会運動としての

人智学に興味あり。抑圧、支配、格差を超えて、個の真実を生きられる社会を実現したい。最近はZOOMで非暴力コミュニケーション（NVC）を勉強したり、ブラジルで買ってきたバイオグラフィックの本を読むのが楽しい。

毎日 Whatsapp というアプリ（LINE の様なもの）を通じて、顔見知りの人たちが炊き出しや支援物資を配っている写真などがブラジルから送られてきます。真などがブラジルから送られてきます。一年滞在していた場所の近くのテント作りの家の家庭の状況などです。

友だちになった家族や、娘の通っていた幼稚園の同級生の家庭が危機に直面しています。新型コロナウイルスで失業し、プロパンガスやお豆を買えないくらいに物価が上昇中。給付金もなく、喘息や糖尿病などの持病を持つ友人の顔を思い浮かべては、無事を祈っています。

写真をみてはコミュニティを越えて

「おおきな歌」プロジェクト

四月下旬、テレビ会議システムZOOMを使い、元モンチアズール・ボランティアを中心に「おおきな歌」をモンチアズールへ届けました！モンチアズールでは新型コロナウイルスによる感染拡大に伴い、ファミリーヘルスの職員も医療の最前線で働くことになり、身体的にも精神的にも大変厳しい毎日を送っているとの知らせを受けたからです。

録音当日、日本各地、ブラジル、スイス、ドイツなどさまざまな所から集まったせいか、微妙な時差があり、タイミングが全く合わない！合唱にならない！（苦笑）最終的に一人一人がワンフレーズずつ歌い、日本語に続きポルトガル語も付け、三番まで歌うことができました。「おおきな歌」は長年モンチアズールでボランティアが歌い継いできた歌です。いっしょに過ごした大切な時間、大切な人たち、何年たとうと忘れてはいません。Estamos juntos!（私たちはいつも一緒！）



おおきな歌だよ
あの山の向こうから聞こえて来るだろう
おおきな歌だよ
ちいさな歌だよ
あの山の向こうから聞こえて来るだろう
ちいさな歌だよ
Muito grande
Essa canção
Vem de longe
do Japão
Saudades
da Monte Azul
Muito grande
no coração
(日本語訳)
おおきな歌だよ
はるばる日本から恋しいよ
モンチアズール
おおきなサウダージ

支え合う、モンチアズールや他団体のブラジル市民の毎日の活動に希望と力強さをもらっています。

安藤 まつや

Massa Ando

スイスで二児の父、主夫の生活をしています。コロナの外出規制でも以前と変わらない生活です。朝起きて朝食の用意、子どもを学校に送り出し、掃除・洗濯・ご飯の準備、あつという間に子どもの迎えるの時間。お昼を食べたら片付けて、買い物行って、またご飯の準備。日本のお母さんはずーっと、外出規制のような生活をしてきたのだと気が付きました。

今、共働きの家庭の子は一日中路上にいます。家庭にいる主婦・夫の重要性。どれだけ社会はわかっているのでしょうか。地域コミュニティが崩壊した今、お母さんの家庭での役割は一番前より孤独でそして複雑になったと感じます。

パンデミックでのポジティブな影響は、オンラインです。家庭の主夫をしながら、東海大学の講義を聴講しています。朝六時から学生と一緒に画面の

中に並んで受講です。モンチアズールのサポートもオンラインミーティングが活発になりブラジルが近くなりました。パンデミックで世界中の仲間がさらに身近になりました。

大嶋 敦志

Atsushi Oshima

どうも、まいどっ！CRI運営委員であり、「あなたを美しくするキッチンカー『ぽたくじゅ屋』」代表の大嶋敦志です。モンチアズールには二〇〇九年～二〇一〇年にかけて、一年間いました。

現在は、新型コロナの影響をもろに受ける飲食業の経営をしています。第一波は無事に乗り越えることが出来ましたが。この先、事態は良くなるのか悪化するのかわかりませんが、這いつくばっても終息するまで暖簾を降ろさずにいられたら、それだけで一等賞です。「ピンチはチャンス」とまでは思えませんが、泥水の中でも目を開き、僅かな光を辿って生き残ります。コロナめ、潰せるもんなら潰してみやがれー！

大谷 未来

Miku Otani

大学時代にシュタイナー教育と出会う。その後小学校教員を三年間務めるも、本当のわたしと真の自由を求めて北海道「ひびきの村」へ移住。

一年間シュタイナー教育教員養成基礎プログラムを受講し、わたしという存在と向き合う。わたしと生きることを考え始めた頃モンチアズールと出会い、一年間のボランティアを決意。

二〇一八年の九月から一年三ヶ月のボランティアを経て、わたしを生きるための新しい扉を今、開こうとしている。調和を奏でるオイリュトミーに魅了され、二〇二二年よりブラジルでの受講を切望している。

コロナ支援として立ち上がったオンラインスクール「つながるがっこう」にファシリテーターとして参加。全国のこどもたちとオンラインでも心はつながるといふ新しい感覚をえた。モンチアズールでの活動を伝え、真の豊かさとはなにかを感じてもらおうよい機会になった。ブラジルでお世話になった場所では、医療従事者へ千羽鶴を贈る

プロジェクトが立ち上がった。私も折り方を動画にして送るなどできる形で参加。日本もブラジルも関係なく世界がひとつにつながる日をゆめみている。

小貫 大輔

Daisuke Onuki

一九八八年から一九九三年にかけてモンチアズールでボランティア。当時急激に深刻化していたエイズの問題に取り組んだ。

その後、JICAの専門家として一九九六年から二〇〇一年にかけてはセアラ州で「出産と出生のヒューマニゼーション・プロジェクト（光のプロジェクト）」に、二〇〇三年から二〇〇五年にかけてはサンパウロ州で「平和のための子ども時代プロジェクト」に携わる。

二〇〇六年からは、日本に帰国して東海大学の国際学科で「人間学」、「ジェンダーとセクシュアリティ」、「Global Issues」などの科目を教えている。日本性教育協会理事、日本ブラジル中央協会理事。

今のコロナの状況が、エイズを巡る一九九〇年代のブラジルと重なって見えることから、当時のキーワード「連帯」

を、コロナ後の世界に当てはめて考察し、積極的に発信しているところ。

川原翼

Tsubasa Kawahara

ブラジル生まれ、神戸（兵庫県）育ち。曾祖父母はブラジルへの日系移民。大学生時代にモンチアズールと出会い、二〇〇五年から一年間のボランティアを経験したことから、教員となることを目指した。

卒業後、外国籍の児童生徒が多い秦野市で公立小学校の教員となる。地域の市民団体の方々と協力して、海外にルーツのある子どもたちへの支援活動「彩とりどりの子どもたち」をおこなっている。

新型コロナウイルス感染拡大のため、三月から休校措置。三月十九日には六年生の担任として四年間受け持った子どもたちの卒業式でした。休校で卒業までの最後の大切な一カ月間が失われたけれど、教職員の「こんなときだからこそいい卒業式にしたい」という想いと、六年間で培われた子どもたちの底力で、涙なしには語れない終始あったかい雰囲気にも包まれた素晴らしい卒業式になりました（規模縮小のため、保護者の参加は家族一名に限定、時間も短縮でした）。悔しさもありましたが、それ以上に子どもたちが立派に育って巣立つ姿に感動、うれしさもあり、私もハンカチ三枚分を濡らす涙・涙・涙を流しました。

息つく暇もなく、新しい年度を迎え、新五年生の担任に。ですが、休校が五月末まで延長され、子どもたちとも顔が合わせられず、在宅勤務に切り替わり、モヤモヤした日々を過ごしました。各家庭を一軒一軒回って課題を届けたら、学校に取りに来てもらったり、二回の課題配付がありました。

オンライン授業に切りかえたくても、各家庭におけるネット環境にバラつきがあり、公立学校では「みなが平等であることが保障」されないと、すべてが前に進まないため、それでも、今、自分たちにできることは何かないかと、同僚とともに頭を捻っていました。

結果的には、市の委員会にかけあつて、googleドライブを利用したgoogleサイトという臨時の学校特設サイトをつくり、子どもたちに動画でメッセージや家庭学習をサポートする動画映像などを届けることができ、子どもたち

や保護者からも大変好評でした。

六月からはようやく分散登校が始まります。ですが、感染予防に努めるため様々な制約もあり、また、二カ月間の遅れたカリキュラムを取り戻すために、授業をとにかく前に進めなければいけない一方で、こんなときだからこそ、子どもたちに考えてほしいこと、つけてほしい力をつけるためには何をどう教えなければいけないのか…その狭間で現場はとても揺れています。

今年度中にはスクールGIGA構想の前倒しで、一人一台のPC・タブレット端末配当という動きも出てきている中、コロナの裏で教育の形が音を立てて変わってきていることをヒシヒシと感じています。おそらく十年・二十年・五十年先から見ると、今が大きな転換点となることは間違いないです。この大きな変化が日本の未来にとって良い変化となるように、しっかり先を見据えて、現場の人間も波に流されるのではなく、この波に乗り、あるべき方法へ進んでいけるように、進化していかなければいけないと思っています。

西原 里依

Rie Nishihara

二〇〇二年と二〇〇六年と二〇〇八年の二回にわたってモンチアズールでボランティア活動をおこなう。モンチアズールのさまざまな女性たちと出会う中で、彼女たちの深い愛情や力強い生き方に感化される。ブラジルで三人の子育てをしながらドゥーラ（妊産婦の精神面・身体面を支えるお産の伴走者。お産前後のケアもおこなう）になるため勉強中。

ドゥーラの資格をとるためにはボランティア実習をする必要があるのですが、実習先の産科がコロナウィルス感染病棟に改装となってしまうため講座は中断してしまいました。オンラインで開かれる特別授業に参加して勉強は続けつつ、子どもたちとステイホームがまだまだ続く予定です。

橋口 博幸

Hiroyuki Hashiguchi

二〇〇六年に半年間、モンチアズールにボランティアとして滞在。帰国後、インドネシア・バンドウン工科大学と武蔵野美術大

学の共同で行われた竹デザインプロジェクトに参加。以来、竹を中心とした制作・活動を行う。二〇一五年より故郷の鹿児島を拠点にしている。CRIでは印刷物のデザインを担当。現在、四児の父。

鹿児島では新型コロナ感染者数が少ないこともあり、休校により春休みが延長した感覚程度でした。個人は竹オブジェ制作などのイベント系・展示会がすべて流れてしまいました。グライフックデザインの仕事がけっこうたまっていたので自宅で日々PCに向かっていきます。今までは月の半分を竹の仕事などで県外で過ごしていましたが、今は家にほとんどいるので子どもたちとの時間が多くとれるため幸せを感じています。

星 久美子

Kumiko Hoshi

二〇一〇年、東海大学国際学科在学中にブラジル北東部にあるカノアケブラダ、エスティーバン村に半年間滞在。村唯一のシュタイナー保育園の手伝いをする。帰国後、青年海外協力隊、教育系NGO職員、モン

チアズールボランティアなどを経て、現在は日本に暮らす外国ルーツの子もたちに関わる仕事をしている。学生時代にはじめてブラジル学校の子もたちなどを集めたマルチカルチャーキャンプのセミナー版として、二〇一五年から「UNESCOユースセミナー」を企画運営している。

緊急事態宣言が出されてから、すぐに在宅ワークになりました。書類に印刷が必要だ、とか請求書はPDFは不可、だとかイライラすることもありますが、テレビ会議中にニアアインと登場するうちの猫に癒やされながら、ストレスフリーで仕事ができています。幸運だと思います。

今日（六月一日）は二ヶ月振りに電車に乗りました。時間ぴったりに来る電車に乗るためにホームへの階段を猛ダッシュ。マスクで苦しい……。時計に縛られながらこれまで生きてきたことを実感。これって非人間的じゃないですか？時計を作ったのは人間だけ……。。

事業 3. 他団体主催のマルチカルチャー・キャンプへの参加・協力

事業担当者： 大嶋 敦志

8月7日から3日間、「体験創庫かけはし」が主催するマルチカルチャー・キャンプが岐阜県高山市清見町の自然体験施設にて開催された。地域の小学生と、HIRO 学園（県内のブラジル学校）の子どもたち総勢 48 人が集い、川遊びや果物の収穫など、自然体験を通して交流した。例年通り、CRI 運営委員の大嶋が参加。モンチアズールでの経験を活かして、プログラムの組立や、交流が円滑に進むようにサポートした。

事業 4. お産サポートの会への支援

事業担当者： 小貫 大輔

4月16日、ニュージーランドから来日中だったカレン・ギリランド氏（ニュージーランド助産師会事務局長）を東海大学に迎え講演会を開催した。その講演会の中で、愛知県と静岡県でドゥーラ（*）をしているブラジル人女性 2 人との対談を実施して、日本におけるブラジル人女性のお産の状況について意見交換をおこなった。

*

ドゥーラ

妊産婦へのサポートを提供する「お産の伴走者」

事業 5. WSIF 英語版報告書作成

事業担当者： 小貫 大輔

2018 年度に開催した「第 4 回「社会イニシアティブ、世界フォーラム」」についての報告書を英文で作成した。写真を豊富に取り入れることで読みやすくした。直接英語で執筆したため、日本語版は作れなかった。この報告書では、フォーラムの開催にあたって日本のシュタイナー学校とユネスコスクールの間の協力関係が深まったことを述べ、このような WinWin な関係を世界のシュタイナー学校および、それらを通じて各国の他のユネスコスクールとの間でも広げていきたい旨を述べた。12 月にカイロ（エジプト）で開催された「第 5 回「社会イニシアティブ、世界フォーラム」」に運営委員の小貫と安藤が参加した際には、この報告書を各国から集まった参加者に配布した。このフォーラムでは小貫と安藤に加えて、京田辺シュタイナー学校の顧問で大阪府立大学副学長の吉田敦彦さんの 3 人で教育に関するワークショップを担当し、世界のシュタイナー学校とユネスコスクールの連携を推進するネットワークの立ち上げを提案した。ゲーテアヌムの理事たちの賛同もえて、まずはワークショップ参加メンバー同によってネットワークが立ち上げられ、世界の他のシュタイナー学校にも共同署名の呼びかけ文を送ることが決められた。

2019 年度 事業報告案

2019 年 1 月 1 日 ～ 12 月 31 日

事業1. 東海大学での UNESCO ユースセミナーの共催

事業担当者: 星 久美子

UNESCO ユースセミナーは5回目を迎え、2019 年度は 100 人を超える高校生、大学生、教員の参加があった。ブラジルのカンピーナスから来日中だったブラジル人ユースグループも参加し、セミナーを盛り上げてくれた。今回のテーマは「コスモポリタン」。「社会イニシアティブ」、世界フォーラムでも講演していただいたゲーテアヌム(*)のジョン・スリーさんのお話を聞いたり、グループワークをおこなったりして、コスモポリタンとは何かディスカッションした。何より、今回はカンピーナスのブラジル人ユースグループの存在感が大きく、彼らが中心となってダンスをしたり、歌ったりなど、いつもよりも体を動かすことが多いエネルギーなセミナーとなった。参加高校生については、トルコ系のインターナショナルスクール、ブラジル学校 2 校からまとまった人数が参加してくれた。いつも参加してくれている朝鮮学校からの参加がなかったので、次回は日程を事前に調整して決定できたらと思う。

*

ゲーテアヌム

スイスにあるシュタイナー協会連盟本部のような組織

**UNESCO ユース
セミナー 2019 の様子**



<https://youtu.be/05UwBbbWhkA>

事業2. 外国につながる子ども支援／秦野

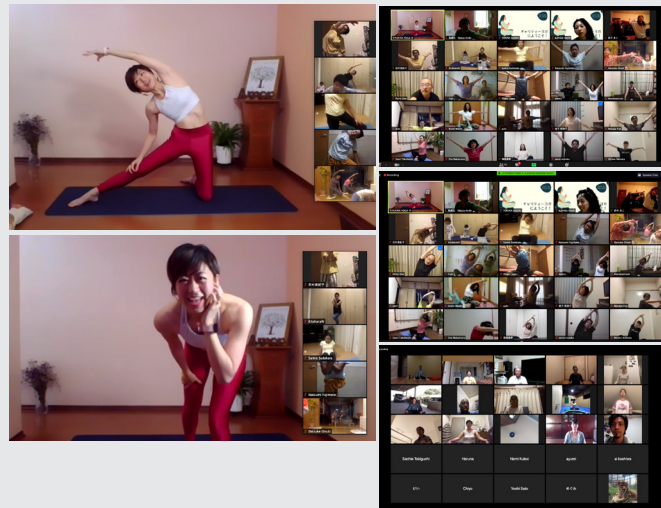
事業担当者: 川原 翼

昨年度からの活動を受け、地域の外国籍市民(ブラジル人コミュニティ、ベトナム人コミュニティ)にインタビュー形式で聞き取り調査を行った。その聞き取り調査の中で、多くが日本の学校文化が理解できない、先生たちとのコミュニケーションがうまくいかないといった問題を抱えていることが明らかとなった。また、それと同時に、秦野市教育委員会と協力して、秦野市内小学校にて教職員向けにワークショップを行った(7月末秦野市立南小学校)。また、市の教育部長・各担当者の課長や指導主事とも意見交換会を開いた。教職員向けのワークショップには市内の小中学校や幼稚園・保育園・子ども園の教職員が 60 人以上の参加があった。教職員の声の多くは、保護者とのコミュニケーションの難しさを訴えるものが多かった。8月25日には、愛知淑徳大学の小島祥美准教授を秦野市に迎えて、「未来の日本を担う《外国につながる》子どもたちのために」と題する講演会とワークショップを開催した。日本の学校文化や日本の算数の教え方が分からないという外国籍保護者からの要望を受け、「保護者のための小学校の授業」を外国籍保護者向けに行った。市内小学校やキリスト教会などにて計3回開催し、算数のかけ算九九やわり算の筆算の仕方、国語の音読についてなどのテーマを扱い、保護者の方々からも大変好評だった。「日本語教育の推進に関する法律」が6月に成立したことを受けて、12月には、バイリンガル教育の第一人者であるカナダのトロント大学の中島和子先生をメインスピーカーに迎え、「日本語教育推進法に関する国際フォーラム」を JICA 横浜にて開催した。その中で、子どもの視点から考えたときの日本語教育推進法に関する「10の提言」が作成された。

へ送金し、他の方にも手伝ってもらって実際に毛布購入、配布をおこなう予定です。

こんなにも多くの方たちのモンチアズールを思う気持ちがオンラインで繋がり、こんなにも大きな力になるなんて……。この場を借りて、応援してくださった皆さまにお礼を申し上げたいと思います。ほんとうに、ありがとうございました !!!

(星 久美子)



事業 4. お産サポートの会 (ダールス) への支援

事業担当者： 小貫 大輔

お産をめぐる日本とブラジルの関係について研究するべく、1年間の予定でブラジルのブラジリア大学から来日し神戸大学に籍を置いた研究者 (Dr. Rodrigo Pires) と協力して、このお産サポートの会の活動を広く知ってもらい、日本の助産関係者や医療関係者とつないでいくためのサポートをする。参考までに：小貫は、2020年6月にバリ (インドネシア) で開催される予定だった国際助産師会の国際大会で、お産をめぐる日本とブラジルの関係について発表するように招待を受けたが、新型コロナウイルスの感染拡大を受けて今年の開催は見送られて来年に延期されることになった。

事業 5. ワルドルフ・ユネスコスクール・ネットワークの運営

事業担当者： 小貫 大輔

「ワルドルフ・ユネスコスクール・ネットワーク」への参加を世界各地の他のシュタイナー学校に呼びかけていく。また、参加を表明したメンバー校相互間のコミュニケーションを促進する。5月には「モンチアズールインターナショナル」のドイツでの集まりに、他のメンバー校を誘う予定だったが、新型コロナウイルスの感染拡大を受けて今年の開催は中止となった。

事業 6. 新型コロナウイルスの感染拡大に対処するための緊急活動

事業担当者： 小貫 大輔

新型コロナウイルスの感染拡大の状況を見極めながら、ブラジルのモンチアズールや、日本各地のブラジル人コミュニティが、今後必要とすることになる対処策をコミュニティのメンバーたちと一緒に考え、必要とされることに柔軟に対応していく。

2020年度 事業計画案

2020年1月1日 ~ 12月31日

"チャリティーヨガ"イベントを開催しました！

6月13日(土)、サンパウロ在住でヨガインストラクターのYUKINAとオンラインでのチャリティーイベントを開催しました。YUKINAは2009年から2010年にかけてモンチアズールでボランティアをしていました。

これから冬に突入するサンパウロ。コロナだけでなく、風邪やインフルエンザなどの病気のリスクを下げるため、近隣住民へ毛布を配れたら……

という声がモンチアズールからありました。わたしたちに何かできないか。そこでチャリティーヨガを計画し、参加費を全額寄付へ回そうと考えました。

フェイスブックなどで宣伝し、71人が当日ヨガに参加してくださり、95人もの方々からご寄付をいただきました。寄付金の総額は、**325,000円**と**350レアル**にも上ります！

集まったお金はサンパウロ在住のYUKINA

事業1. UNESCO ユースセミナーの共催

事業担当者： 星 久美子

今年も、神奈川県ユネスコスクール協議会と東海大学教養学部との共催でUNESCO ユースセミナーを開催する予定である。しかし、「新型コロナウイルス」の感染拡大予防の影響で学校が休校になり、今後どのようなのか現段階では予想ができないため、国内外の状況に合わせて開催するかどうかも含めて検討していくこととする。開催できるようであれば、他の参加メンバーの学校と連絡を取り合いながら日時、場所、規模を考えていく。

事業2. 外国につながる子ども支援／秦野

事業担当者： 川原 翼

昨年度の活動報告書を配布するなどして活動の輪を広げ、秦野市や愛川町に住む外国籍の子どもたちやその保護者達を支援する活動を可能な範囲で継続していく。8月には、秦野市の教育委員会に協力して本町中学校区の幼少中合同研修と、中井町の教育委員会に協力して教員研修を実施することが決まっていたが、開催延期の模様。全国のブラジル学校に対しては、新型コロナウイルスの感染拡大を受けてどんな心配事や悩みがあるのか、Zoom 会議などを通じて聞き取りをおこない、必要に応じて関係機関につないでいく。

事業3. 他団体主催のマルチカルチャー・キャンプへの参加・協力

事業担当者： 大嶋 敦志

例年通り、夏期に、岐阜県内の施設にて、地域の小学生とHIRO 学園の子どもたちを集めての開催が予定されている。しかし、新型コロナウイルスの影響を受けて、実際に開催するのかを含め、具体的な日程などは決められていない。

収入の部		2019 年度予算	2019 年度決算	
	前年度からの繰り越し	1,487,186	1,487,186	
	会費・寄付	450,000	279,880	
	銀行利息	10	4	
	物品販売	計上無し	10,040	
	雑収入	計上無し	2,030	通信販売 13 冊分
	事業収入 (* 1)	300,000	463,240	参加費 97 人分
	事業収入 (* 2)	300,000	41,000	
	収入計	2,537,196	2,283,380	
支出の部				
事務局経費	人件費	240,000	340,000	45,000 円× 4 か月+ 20,000 × 8 カ月
	交通費	23,448	33,156	
	ホームページリニューアル	30,000	5,302	
	インターネットサーバー	20,368	20,486	
	備品消耗品	10,000	2,312	
	振込手数料	2,000	2,812	
	送料	10,000	300	
	会議費	6,000	11,112	
通信発行経費	通信送料	50,000	57,172	
	人件費 (編集)	60,000	60,000	
	通信印刷代	150,000	177,670	
	通信備品消耗品	0	0	
	総会ハガキ	3,000	8,308	
事業費	事業 1 (* 3)	421,828	421,828	彩とりどりの秦野
	事業 2 (* 4)	0	0	
	事業 3 (* 5)	0	0	
	事業 4 (* 6)	20,000	20,000	
	事業 5 (* 7)	25,180	25,180	
	支出小計	1071,824	1,185,638	
	次年度への繰り越し	1,465,372	1,097,742	
	支出計	2,537,196	2,283,380	

- * 1 事業 1 : UNESCO ユースセミナー開催
- * 2 事業 5 : WSIF 英語版報告書作成ファンドレイジング
- * 3 UNESCO ユースセミナー
- * 4 外国につながる子ども支援／秦野
- * 5 マルチカルチャー・キャンプ協力
- * 6 お産サポートの会への支援
- * 7 WSIF 英語版報告書作成

2019 年度 収支報告案

2019 年 1 月 1 日 ～ 12 月 31 日

		決算			
概要	内訳	単価	数	小計	
収入					
参加費（全日参加）	高校生 / 大学生 / 大人	4,000	87	348,000	
参加費（全日参加）	教員（国際友好会館）	6,000	10	60,000	
参加費（部分参加）	食費 / 宿泊のみなど	55,240	1	55,240	
			合計	463,240	
支出					
宿泊費	クラブハウス	700	100	70,000	外部（＊1）
		500	10	5,000	本学
	布団代	648	165	106,920	クラブハウス、教室用
	国際友好会館	1,000	4	4,000	教員宿泊棟
食費	昼食（1日目）	34,675	1	34,675	食券（＊2）
	夕食（1日目） / 朝食（2日目）	154,000	1	154,000	ハラルレストランくるみ
	飲料	4,382	1	4,382	
物品購入費	T シャツ	7,965	1	7,965	25 枚
	印刷代	1,120	1	1,120	コンビニマルチプリント
	絵の具	5,400	1	5,400	
	その他文具	3,534	1	3,534	
保険料	イベント保険	24,832	1	24,832	
			合計	421,828	

* 1
カンピーナスの
参加者は連泊分を含む

* 2
500 円まで使用できるもの

事業1 UNESCO ユースセミナー 収支報告案

収入の部**2020 年度予算**

前年度からの繰り越し	1,097,742
会費・寄付	300,000
銀行利息	5
収入計	1,397,747

支出の部

事務局経費	人件費	120,000	10,000 円× 12 カ月
	交通費	12,120	2,020 円× 6 回
	ホームページリニューアル	100,000	委託先：持留デザイン事務所
	インターネットサーバー	16,500	
	備品消耗品	3,000	
	振込手数料	2,000	
	送料	5,000	
	会議費	10,000	
通信発行経費	通信送料	30,000	
	人件費（編集）	60,000	
	通信印刷代	120,000	91 号、92 号
	通信備品消耗品	3,000	
	総会ハガキ	7,000	
事業費	事業 6 緊急対応	300,000	内容に応じて予算額変動あり
	支出小計	788,620	
	次年度への繰り越し	609,127	
	支出計	1,397,747	

2020 年度 予算案

2020 年 1 月 1 日 ～ 12 月 31 日

モンチアズールの助産所 カーザ・アンジェラでの出産レポート

青山 蓉香

ブラジル（サンパウロ）にはなぜか「東洋人はスピード出産」という神話があります。妊娠してから行く先々で言われ、信じてはいませんでした。結果は、神話通りにはならず……。モンチアズールにある助産所カーザ・アンジェラでの私の出産体験をシェアしたいと思います！

ブラジルの公的医療制度

去年七月に妊娠がわかってから、本を読んだり、人の話を聞いたりしてサンパウロでの出産について調べ始めました。初産だったので、ブラジルでの出産なんてわからないことだらけ。まず、どういうところで産むのか？ブラジルではお産も含め受けられる医療は、公的医療制度を利用するか私立病院を利用するかで大きく異なります。

ブラジルの公的医療制度は誰もが無償で受けられる素晴らしい制度。しかし、設備や医療の質が悪い上待ち時間が長いので、お金が

ある人は民間保険に加入します。私立病院であれば、日本と同等、分野によっては世界最先端の医療が受けられます。

ただし出産となると、私立病院ではほとんどのお医者さんが帝王切開派。ブラジルで帝王切開率が高い理由は、陣痛の痛みを恐れて帝王切開を希望する妊婦さんが多いことも事実ですが、手術であれば予定を組むことができる、何時間かかる自然分娩に比べて一時間程度で終わる帝王切開は割りが良いなどお医者さん側の都合もあります。後にも書きますが、逆に人や設備などのリソースが手薄な公立病院では帝王切開率は下がります。

私は自然分娩を希望していたのですが、検診で出会った四人の私立病院のお医者さんは、自然分娩は何が起るかかわからずアブナイので帝王切開をするように勧めてきました。また、自然分娩を希望していても、子宮口が開かない、へその緒が赤ちゃんの首に巻きついている、赤ちゃんが疲れてきているなど、いろいろな「理由」で急遽帝王切開になっ

たケースをいくつも耳にしました。母子ともに健康である場合、帝王切開は自然分娩よりも高リスクであることは医学的に証明されています。私は、自分の意思ができる限り尊重される場所で産みたいと思いました。

カーザ・アンジェラ

二〇〇九年にオープンしたモンチアズールの助産所カーザ・アンジェラは、サンパウロではたった二つしかない助産所のうちのひとつで「お産のヒューマニズム」を提唱し実践しています。

自然の力とリズムを大切にし、お母さんと赤ちゃん主導のお産ができる場所として知られています。公的医療施設ですが、所得に関係なくこのビジョンに共感する人がここでの出産を選んでやっています。

特徴としては、通常病院で行われる陣痛誘発剤、麻酔、会陰切開などの医療介入がないこと。ドゥーラ（妊婦さんに寄り添いサポートしてくれる人）を含めた二人の同伴者が出産に立会

い可能です。分娩室には、バスタブやシャワーなどがあり、歩き回ったり、好きな姿勢をとることができる。また、部屋を暗くしたり、飾りをつけたり、好みの音楽や食べ物、飲み物を持ち込んで最大限リラックスできる環境で赤ちゃんを待つことができます。

誕生後の赤ちゃんの扱い方も特別で、生まれたらへその緒は切らずすぐにお母さんの胸へ。体を洗ったり吸引などをせず、親子の絆づくりに重要な生後すぐの時間を大切にします。

カーザ・アンジェラへは妊娠二十八週目から通うことができ、定期検診の他、週一回の両親学級で出産やバースプランの立て方、授乳や沐浴の仕方などを教えてくれます。両親学級は各回違う助産師さんが担当しており、出産日までにできるだけ皆さんの助産師さんと知り合いになっておくという意味もあります。

産後は、赤ちゃんの成長に合わせたテーマで二カ月に一度勉強会があり子どもが一歳を迎えるまでサポートしてくれます。モンチアズールのファヴェーラからすぐ近くにあり、

お母さんと赤ちゃん主導のお産ができる場所

緑の植木に囲まれた大きな一軒家のような建物。ドアを開けると、温かい色に塗られたホールが迎えてくれます。誰かのお家のように居心地よくほっとする空間です。安産のためには妊婦さんがリラックスできる環境であることが鍵。ここだったら安心して産めるなあとと思いました。

ハードル——保健所

そんな素敵なカーザ・アンジェラですが、そこで出産するはいくつかのハードルがあります。まず、無償で（公的費用で）出産するためには、公立の保健所で妊婦健診を受ける必要があります。私は、初めは民間保険のきくクリニックで健診を受けていましたが、妊娠四ヶ月目くらいから公立の保健所にも行くようになりました。

初めて保健所に行った日、妊娠していることを確認するための尿検査でエスプレッソ用かと思われる小さい紙コップを手渡され、トイレでお小水をとってくるように言われました。

トイレは診察室を出て待合室を通ったその先。人でいっぱい待合室を蓋もない紙コップを持って通るなんて、正気？保健所の衛生管理にかなりの不安を感じました。でも、カーザ・アンジェラで産むためには避けては通れません。

私が通っていた保健所は順番待ち電子システムがあり、保健所としてはかなり整ったところだったので、十分程度の検診に一時間待ち、さらに次回の検診日を決めるために三十分以上待つのは普通でした。

ハードル——妊婦の受け入れ条件

第二のハードルは、カーザ・アンジェラの妊婦の受け入れ条件。日本の助産院も同じだと思いますが、緊急時のためのオペ設備や医師の常駐がないため、低リスク出産でなければ受け入れてくれません。

条件は、四十歳以上の高齢出産でないこと、過去に帝王切開の経験がないこと、双子でないこと、臨月に逆子になっていないこと、高血圧や糖尿病、貧血などの症状がないこと、お産開始時に三十七週から四十週の間であることなど。

また、出産中何か異変があった場合は、車で五分の公立の提携病院に搬送されます。自分の希望するところへは搬送してもらえないので、私たち夫婦にはこれがかなりジレンマになりました。

カーザ・アンジェラで産みたいけれど、もし何かあって公立病院に運ばれたらどうしよう。結局、その公立病院見学ツアーに参加し、待合室や廊下は人で溢れかえっていましたが、搬送される場合は緊急なのですぐに対

カーザ・アンジェラ
出産した部屋



応してもらえること、産科の病棟は想像していたよりも普通であることを確認し安心することができました。

さらに、この病院での帝王切開率は四十%弱と聞き、私立病院に搬送されるよりも希望の出産ができそうだと感じました。カーザ・アンジェラで産もうと心を決めたのは三十八週目。陣痛が始まる九日前でした。

陣痛開始

妊娠最後の三カ月は歩くのが大変になっていたので自宅から仕事をしていました。結局、陣痛開始の前日まで働き、迎えた金曜日。午後から今まで感じたことのなかった腰痛が間隔を開けて来るようになりました。

金曜日の夕方といえバ

ンパウロは渋滞地獄。カーザ・アンジェラは自宅から車で最短三十分。混んでいるときは一時間半以上かかります。タクシーを呼び出発。なんとタクシーはバス優先レーンを走行できる

ので、私たちは大渋滞を横目にすいすい。車を持つていなかったことが幸いし、一時間程度で助産所に着くことができました。

道中、夫と運転手は運転手の子供が生まれたときの話で大盛り上がり。私は陣痛が痛みを増し、盛り上がっている二人に超イライラ。

到着し、助産師さんにお腹にモニターをつけてもらおうと安堵のためか涙が止まらなくなりました。そのまま分娩室へ移動。分娩室といっても、ベッドとバスタブ、肘掛け椅子などがある寝室のような普通のお部屋です。

早速バスタブにお湯を張り、ブラジルに来てから念願だったお風呂に！でも、陣痛は和らぐどころかどんどん激しく。もうリラクセスどころではなく、言語を使い分ける余裕もなし。夫に日本語、英語、ポルトガル語を全部混ぜて湯加減の調整を命令していました。

全身ぐちゃぐちゃで数分おきに痛みで叫ばないといけないのに、どうやってタクシーに乗れって言うの？

万事休す

夜の八時を回り助産師さんたちはシフト交代。そのままうんうん唸り続け、おそらく夜中頃、陣痛はずっとピークなのに子宮口の開きはたった二センチ。

担当の助産師さんに一度家に帰って休むように言われてしまいました。このタイミングで家へ帰れとは……。全身ぐちゃぐちゃで数分おきに痛みで叫ばないといけないのに、どうやってタクシーに乗れって言うの？痛み止めがほしくてもカーザ・アンジェラにはいわゆる「薬」というものは存在せず。

万事休すと思ったとき、破水。破水したらもうここで頑張るしかありません。帰らせられずに済みほっとするも、陣痛は激しくなるばかり。

素人アドリブ出産

次にシャワーへ移動。バランスボールに座るのも辛く、手すりにつかまって陣痛をやり

過ごすこと数時間。陣痛の波のやり過ごし方をわかっていなかった私は、痛みが来るたびに「痛い痛い！きついきつい！」と息が続く限り叫んでいました。あまりに叫ぶので、助産師さんのシフト交代では「イタイ」は「Doi（痛い）」という意味だと引き継いでくれていたそうです。

そのうち、波が来るたびに声と息を同時に長く吐いてやり過ごすことを学習。流れるシャワーの下で、吠え続けました。こんなにお湯を出しっぱなしにして、水がないモンチアズールなのにどうしようという思いが頭をよぎりましたが、シャワーを止めたなら耐えられない。

その間、夜間は手薄のためか、四時間毎の子宮口のチェックと胎児の鼓動確認に看護師さんが来るくらいであとは夫と二人きり。助産師さんがずっと付いてくれるものだと思っていたので、予想外の心細さ。夫は腰をさすったり、水を汲んできたり、看護師さんと呼んできたり。夫がドゥーラ、いや助産師状態。陣痛をやり過ごすためのアドバイスどころか、経過状態もよくわからないまま、夫

絶体絶命の時は出尽くした と思っただけが出てきます。

と私二人の素人アドリブ出産になってしまいました。

二月十五日八時四十五分

ついに朝が開け、シフトが変わり、四人の助産師さんと看護師さんがどつと部屋に入ってきました。このとき陣痛開始から十五時間程度。最後のチェックから五時間以上経っていた子宮口を確認。

すると、もう頭出ているよ、と。指の関節一つ分のところに頭があると言われました。自分ではまだ開ききっていないと思っていはいきむのを我慢していたので、真つ暗闇に光が差したような安堵感。でも、その頃には体力はほぼ限界。酸素吸引器をつけて頑張ってもうまくいきめず頭が出てこない。

そのうち、赤ちゃんの鼓動が不規則になってきたのでこのままでは病院へ搬送しないとイケないかもしれないと言われました。タクシーで帰れと言われたときは無理！と思っただけ、股の間に頭が挟まったまままで病院に行くのはもつと無理！絶体絶命の時は出尽くしたと思っただけが出てきます。

数回のトライの後、挟まっていたものがずるっと抜けるような間隔がありました。そして数秒と思われた静けさの後に「びゃっ」という小さな声が。二月十五日八時四十五分、陣痛開始から約十六時間。

最後は無理矢理押し出して産んだようだったけれど、無事に生まれてきてくれました。エコー検査で一度も顔見せてくれなかったもので、顔が見たくてうずうず。目をつぶった顔。カッオブシみたいな匂い。胸に抱いているこの赤ちゃんが自分の体から出てきたなんて信じられません。元気で生まれてきてくれたこと、苦しい陣痛が終わったこととにかくほっとしました。

新しく生まれた家族だけの時間

カーザ・アンジェラでは、産後一日から二日間入院して経過チェックと授乳などの指導をもらえます。ベッドが二つとゆりかごが一つある個室で休養。

見学に行った他の病院では、産後は共同部



屋で同伴者のためのベッドはなかったため、家族で過ごせる個室なんてとても贅沢。産後最初のご飯はミートソースのパスタ。叫びすぎて声が出ないだけでなく、ご飯を飲み込むのにも喉が痛む始末。

カーザ・アンジェラの院長さんが「お産のあとはトラックに轢かれたようになる」と表現していましたが、まさにその通り。肺も喉も痛いし、足腰もガクガク。手すりにずつつかまっていたので、胸筋と二の腕は筋トレ後のような筋肉痛。

でも、カーザ・アンジェラの美味しい食事と助産師さんや看護師さんのサポートのおかげで、なんとか歩き回れるようになるまで休養できました。お見舞いの人も最初の二十四時間は来られないことになっていて、新しく生まれた家族だけの時間を大切にしてくれます。

二日後、授乳ができるようになったのを

目をつぶった顔。カツオブシみたいない匂い。胸に抱いているこの赤ちゃんが自分の体から出てきたなんて信じられません。

チェックされて退院。助産所を出ると外は太陽がじりじりと照る真夏の真っ昼間。車の窓から入ってくる気持ちいい風、後部座席の間にはベビーシートに眠るちっちゃな命。十六時間の戦いのあとは、なんだか夢のようでした。



はじまりのはじまり。

大谷 未来

まえおき

わたしは、二〇一八年九月から二〇一九年十二月末までの一年三か月モンチアズールでボランティアとしてはたらきました。滞在していたのはサンパウロの外れにあるオリゾンチアズール。ボランティア後半には小学校で二年生の授業を受け持ったり、一年生のあそびの時間を受けもったりもしましたが、基本的には人手不足だった保育園にはいり、二歳児と四歳児のクラスで先生たちとともにはたらきました。今回はしごこのことよりも私の内側でおこったことを綴ります。



わたしとモンチアズールの出会いはある日突然おとずれた。二〇一八年春、御殿場で開かれた世界フォーラム。友人にさそわれて何気なく参加していたわたし。三日目のおわりの会までは、これからじぶんの身におきることなど予想もしていなかった。会のさいこのさいご。ウテさん（モンチアズールの発起人）がひとりひとりスタッフを紹介したときのこと。ふっとなにかあたたかいものにつつまれていくのがわかった。そしてこみ上げてきたおもい……

いっしょにはたらいてみたい。

ちょうど「はたらく」と「いきる」ことについて考えていた矢先のできごとだった。「なにかできることを」といういわゆる社会活動的な発想ではなく、ただただそこに入ってともに生きてみたかった。二〇一八年九月、本当に多くの方々の助けを得て、日本のウラ側ブラジル・サンパウロへと飛びだった。





まっていたのは おおきなおおきな愛。

日本語一本でのりこんだわたし。目にするもの、耳に入ってくるものすべてがはじめてのものばかり。全身の感覚細胞すべてをふるわせてかんじとった。まるで生まれたての赤子のように。それは私の二度目の誕生ともいえた。そんな赤子のわたしに母のようなぬくもり、家族のような居場所をくれたのはオリゾンチアズールでともにはたらき、いきる仲間たちだった。話せない自分を責め、外国人である自分に劣等感を抱いた時期もあった。まちがいを恐れ、踏みだせない自分との葛藤もあった。それでも私の姿をみつけては「MIKO! (多くがMIKUをMIKOと誤ってよんでいた)」と声をかけてくれた仲間たち。「Bon dia! (おはよう!)」と笑顔をむけてくれたまちの人々。ただそれだけ。でもそれでどれほど心が救われたことか。ときずまされた感覚とそのあたかな環境のなかで、少しずつ「わたし」というものに気づき、みとめ、ゆるし、そして解放していった。きっとそれは、みなが変わらない愛でそこにいてくれたから。わたしという存在をそのまま受けとめてくれたから。

あたたかなぬくもりの なかでなにかが消えて いくのがわかった。

解き放つ空間のなかでつながっていく…。その感覚が大きくひろがったとき、「みなちがうけれど、みなおなじ」そうおもえた。どこの国から来たとか、どんな人種とか、どんな環境で育ったとか、ひとりひとりことなる背景があるけれど、みなおなじひとりの人間。同じこの地球にやってきた地球人。そうおもえた瞬間、わたしの内側からなにかがあふれ、じわっとせかいにとけこんでいくのがわかった。まるでにじみ絵のように。

二〇一一年の東日本大震災も、現在のコロナ禍も、私たち人間にとわれていることは何なのだろうか。わたしはこのモンチアズールで体感してきたことに、そのこたえがつまっているような気がしている。



モンチアズールでの経験

倉内 ひかり

私は二〇二〇年二月から三月にかけて、約一ヶ月間モンチアズールに滞在しました。この時期は、世界中でコロナウイルスの感染が拡大しはじめ、ヨーロッパの各国が国境封鎖をしていった時だったので、急遽予定よりも早く日本に帰国することになりました。また、一緒に暮らしていたドイツ人のボランティアたちも全員強制帰国となったため、あまり気持ちの良い最後を迎えることはできませんでした。したが、たった一ヶ月の滞在で、帰るのが嫌で泣くほどブラジルにのめり込んでしまった理由の一つでもあるこのモンチアズールでの経験をここに共有したいと思います。

モンチアズールとは、sonho de luz（ソーニョ・ジ・ルス）という幼稚園で、三歳から六歳までの子どもたち十七人ほどの面倒を見たり、他の保育士さん（ブラジルでは「チーア」と呼ぶ）の手伝いをしました。私は大学でブラジル社会における貧困問題などについて触れていたため、ファヴェーラにあるこの幼稚園に通う子どもたちが「かわいそうな子」

であるというある種の偏見を持っていましたが、実際に見えてきたのはひたすら純粋で素直な子どもたちの姿でした。私が高校留学時にデンマークの幼稚園で世話をした子どもたちや、おそらく日本の子どもたちと変わらない純粋な心をもつ彼らとのふれあいを通して、自らの偏見がいかに間違っていたかということを痛感するとともに、果たしてこの子どもたちが私と同じ年になった時に持っている選択肢の数はどれほどのものなのだろうとも考えました。

ブラジルの経済発展はここ最近話題に上っていますが、一方でこの国は経済的格差も大きい国です。ブラジルで特に印象に残った風景は、サンパウロにおける高層ビル群とそのすぐ隣にあるファヴェーラのコントラストでした。富裕層と貧困層が共存しながらも別世界を生きている様子は、私にとって受け入れることが難しい現実でしたが、モンチアズールのようなあたたかいコミュニティの存在はこの状況を改善する光のようなものであると感じました。



リンダウヴァ宅からの景色



地元の
エスコラ・
デ・サンバ
に参加



カーニバル当日

私が帰国を決めた日に、モンチアズールではその翌週からの閉鎖が決定されました。モンチアズールが閉鎖されるということは子どもたちに無償で食事を提供するキッチンも閉鎖されるということを意味するため、家庭で十分な食事を得られない子どもたちは困難な状況に置かれていることが想像できます。この大変な時期にその場にいて力になることはできませんでしたが、このような形で皆さんに体験を共有することがなんらかの形でモンチアズールを助けることに繋がったらなと思っています。

たった一ヶ月ほどの滞在でしたが、ブラジルが大好きになりました。ブラジルに旅行した人の中にはその土地が好きになってしまっ
て住み始める人がたくさんいますが、彼らの
気持ちがよくわかります。ブラジルは私に
とって理由なく幸せになれる場所です。私は
南米滞在歴もないのに大学では直感でブラジ
ル地域専攻を選びましたが、この直感は自分
にとって正しいものだったと確信していま
す。また来年同じ時期にブラジルを訪れよう
と計画中なので、新たな視点でモンチアズー
ルとブラジルを見つめることができるように
日本ではしっかりと勉学に励もうと思ってい
ます。

佐々木神父の活動と竹

橋口 博幸

二月十四日から二十五日までブラジルに滞在することができました。国際交流基金にお招きいただき、バウルー (BAURU) というサンパウロから車で五時間ほどのまちで「竹あかり」イベントを開催するのが主目的でした。竹あかりとは竹に穴をあけてろうそくやLEDであかりを灯すもの。一緒に良く活動をしてる「CHIKAKEN (ちかけん)」という竹あかりを事業化している会社に依頼が来て、僕はそのサポートというかたちでの渡伯でした。

バウルーのサンパウロ州立大学 (UNESP) では以前から「ヴィヴェルデ (VERDE)」という、竹事業を軸にした入植者たちへの支援プロジェクトを行っています。UNESPとの協働ワークショップを開催してキャンパス内に竹あかりを設置・点灯のお手伝いをしてきました。

このプロジェクト終了後、記録映像作家の岡村淳さんにパラナ州のサン・ジェロニモ・ダ・セーハ (São Jerônimo da Serra) というまちへ連れて行っていただきました。ここはブラ

ジルに渡って六十年以上になる九十歳の佐々木治夫神父が、弱者支援を続けてこられた場所。佐々木神父は現在、人々の生活の糧となるように新たに竹の事業をはじめられており、何かお手伝いできないかと思ってお伺いしました。

佐々木 治夫神父

佐々木神父の活動の経緯を詳細に記すことはできませんが、神父と活動を共にしているシスターたちのまとめた略年表から抜き書きしただけでも以下ようになります。

1930
静岡県浜松市生まれ

1958
二十八歳でブラジルへ

.....

1976 までに無原罪の聖母教会設立・日系カトリックセンター建設

1977

ハンセン病の治療・療養を目的とした「フマニタス慈善教会」設立 (Associação Filantropica Humanitas)

1986

老人ホーム建設

1994

貧困家庭の若者へ奉仕事業開始

2001

佐々木農学校 (Casa Familiar Rural Pe. Sasaki) 設立

2003

アルコール・ドラッグ中毒患者更生施設開設

他にも、犯罪者の精神病患者のケアや MST (土地なし農民運動) の支援など数多くあります。

* 詳細は岡村さんの作品『赤い大地の仲間たち フマニタス二十五年の歩み』『ササキ農学校の一日』などを参照。



▲制作した竹のプロダクトを眺める佐々木治夫神父



▲CHIKAKENの代表 三城賢士による指導



▲パウルで灯された竹あかり

佐々木農学校

今はほぼすべての施設の運営権とお金を他修道会などに引き継いでいるそうです。そして、新たに竹の事業として竹の植林や加工作業場の整備などを始められています。

佐々木神父は時折、「貧しい人たちのために働いていると、神様が助けてくださる」とおっしゃいます。事実、これまでの数々の苦難をさまざまな奇跡的な出会いでぐり抜けてきたそう。その言葉の響きには実感以上の重い意味が含まれているようでした。

僕は今回、サポペーマ (Sapopema) にある佐々木農学校の学生や先生たちと、アサイー (Açaí) という日系人の多い街での二箇所で、竹の文化・活用法を話させていただきました。二箇所とも正直、想像以上に真剣に聞いてくださり驚きました。

農学校では学生たちが、植林した竹の節を調理して瓶詰めにして販売する段取りなどをしていました。この農学校は元々、MSTの支援の一環として、土地を手に入れた人々の子どもたちに農業を教えることを目的に設立されたようです。そのため学生たちは実家の農業の手伝いと学校での寮生活を交互に

行っています。今ではMSTの子どもに限らず、MST以外にも様々な環境の子どもが通っているようです。

農学校の雰囲気はどこかモンチアズールに似ています。三年前に農学校へ伺ったときは、不慮の事故で建物が火災に遭い、ようやく再建し学校再開の目処が立ったばかり……というタイミングでした。そのため家畜がいなかったり、畑に作物が植えられていないなどあまり環境も充実しておらず、先生や生徒たちも苦しそうな様子が寂しかったのですが、今回は設備も充実し、学生たちも先生たちも生き生きとしている様子でした。

僕は一食しか共にしていませんが、昼食の雰囲気はモンチアズールの食堂を思い返させました。それは子どもたちに美味しい安全な食事をたっぷり提供する、という姿勢ではないかと思います。学生たちの家庭環境について僕はほとんど理解していませんが、少なくともこの学校での生活中はバランスの取れた食事をとることができ、かつ勉強もできるという場なのではないかと思うのです。農学校の食堂は先生や学生たちが一緒に美味しい食事を共にし、なんだかあたたかい雰囲気包まれている気がしました。

現在、日本でも各地で貧困家庭に対する支援として子ども食堂の運営がなされています



▲フマニタス慈善協会からの眺め

◀フマニタス近辺の道。植物が美しい。

▶タケノコの生えた様子と、佐々木農学校で制作中のタケノコの瓶詰め。



▲佐々木農学校での講演後撮影。
左から2番目より佐々木神父、橋口、岡村監督。



が、実際、僕の周囲（鹿児島市）でも育児放棄や様々な理由による貧困により満足に食事が取れない子どもが見受けられます。そうした家庭において学校はシェルターでもあり、生命を維持する大切な場であり、また未来への希望を得る場なのだとも感じます。

ブラジルの竹事情

アサイーで話をさせていただいた際、参加者の日系の方々から様々なブラジルの竹事情や活用法を多く教えていただきました。どれも僕は知らないことばかりで大興奮の連続でした。

- ・竹のあく抜きにレンガを使う
- ・ホウライチクを「籠用の竹」と呼ぶ
- ・コサンダケを「中国の竹」と呼ぶ
- ・綿花栽培時までは竹籠が多くつくられていた……などなど

今回、出会った様々な方々に竹の活用についてお話を伺いましたが、ここアサイーで伺ったお話が一番充実していました。ブラジルで竹活用を伺うと多くは中国やインドネシアの先進事例を模したもので、生活に根ざした活用を聞くことは少なかったのです。それ

は竹がアジア圏の文化に根ざしていること、の表れかもしれませんが、元々はあったものの植民地支配による搾取のなかで失われた結果なのかもしれません。また、帰国後に、恩師で長年アマゾンのヤノマミ族やマチゲンガ族と過ごしてきた探検家・医師の関野吉晴さんから伺ったところによると、アマゾンでは竹はたくさん生えているけどあまり活用しているのを見た記憶がない、とのことでした。確かにブラジルの竹は肉厚で巨大なものが多く、細工に向かない、もっと便利な植物がある、ということが理由かもしれません。

竹のつながり縁

佐々木神父とシスターたち、そして場の醸す空気に心安らぎ、大勢の刺激的な人たちとの出会いに胸躍りました。また、美しく手入れされたお庭や周辺環境を少し歩くだけで感動の連続でした。見たことのない植物、昆虫、鳥……岡村さんに案内していただいた、近くの小川沿いを散歩するとなんだか別世界に迷い込んだようでした。後ろから青く輝く蝶に追い越され、ふと音が見る方を見るとハチドリが目の前でホバリングしていたり、木々の覆い茂った小道を抜けると廢墟があり曲がりくねった道の先



▲上が現地で「中国の竹」と呼ばれるホテイチク（コサンダケ）。下が現地で「籠用の竹」と呼ぶホウライチク（キンチク）。

◀ブラジルで多く見られる竹。デンドロカラムス属で日本では「巨竹・象竹」などと呼ばれる。

に木造の橋が見える……とても重病や貧困にあえぐ人が多いまちにいる実感はわからないほど。テレビで見ていると世間はカーニバル休暇を謳歌しているそうでしたが、そうした喧噪からは隔てられた空間でした。

佐々木神父の竹事業、どうにか力になれたらと思います。何かここに暮らす人たちの生きる糧になるようなことを実現したい。そして願わくばブラジルに住みたいと毎日思いました。というのもブラジルで過ごす毎日実に喜びに満ちているのです。この国がたまらなく好きだな、と改めて感じました。

帰国後、今回の渡伯に尽力いただいたシルヴィア・ササオカ（Silvia Sasaki）さんと何か竹のプロジェクトはできないか相談をはじめました。彼女はモンチアズールにも縁が深く、三年前にサンパウロで知り合いました。現在、彼女はバウルのUNESPで竹に関する研究を進めています。彼女が橋渡しとなって今回のプロジェクトは実現しました。是非、日本の竹文化の知見や技術を共有しブラジルの竹文化育成のプログラムが組めないかと思いついて、JICAに申請できないかなどと日々連絡を取り合っています。

ですが新型コロナウイルスの影響は、僕が訪問した直後から世界的なパンデミックとな

り、いまやブラジルの現状は日に日に悪化の一途を辿っています。ブラジルの魅力はいくつもあると思いますがその最大のものは、挨拶に代表される濃密な人間同士の関わり合いだと思っています。その「人と関わることを禁忌とする「魔法」がコロナ禍の現状です。今後の見通しは一切立たず、悲しい。ただただ大好きなみんなにまた再会できることを祈っています。

思えばモンチアズールの食堂の前には竹が植えられていました。僕は十四年前の滞在時には竹に興味もなく気づきもしませんでした。三年前にモンチアズールを訪れた際に竹が植えられていることに気づき、驚き、嬉しくなりました。ウテさんに聞いたらいつかは覚えていないけどずいぶん前から植わっているとのことでした。結果として今回ブラジルに行くことができたのも竹がつないでくれたご縁です。

僕が大好きな竹は日常を支えてくれる、永遠の生命性を持った不思議な植物です。この竹を通して一日でも早くブラジルに何か恩返しできないか模索しています。

CRI - チルドレンズ・リソース・インターナショナル (英語名: CRI - Children's Resources International) について

CRI は、ブラジルと日本の両国で生きる子どもたちの「子ども時代」を守り、支援することを目的とするグループです。CRIという名前には、「子どもたちのための国際資源」という意味があります。参加するメンバーが、それぞれに自分の持つ能力、知識、情報、時間、資金などを「資源」として提供しようという会です。1988年の創設以来、主にブラジル、サンパウロ郊外のファヴェーラ（スラム街）でシュタイナー教育・医療・農業をベースに活動するモンチアズール・コミュニティ協会を応援してきました。現在は、この協会でボランティアとして働いたことのあるメンバーたちが中心となって会を運営しています。日本でも、モンチアズールでえた経験をいかして、ブラジルなど海外にルーツのある子どもたちの支援に力を入れています。

CRI 会員の募集

CRI では、活動を支援して下さる会員を募集しています。それぞれが可能なリソース（資源）を持ち寄るという考えから、一定の会費を定めていません。ご参考までには、多くの会員の皆様に年に 3,000 円～5,000 円を振り込んでいただいています。継続した活動を可能にするために、毎月 2,000 円（年間 24,000 円）、5,000 円（年間 60,000 円）と決めて振り込んでくださる方もいます。CRI の会員となっていた方には、活動の最新情報を載せた「くりあんさブラジル通信」を年に 2 回お送りさせていただきます。

会費納入方法

■ 郵便振替

□ 座番号 **00200 - 9 - 62458**

加入者名 **C.R.I**

* 郵便振替で送金いただく場合は通信欄に「CRI 会費」などとメッセージをご記入ください。

■ 銀行振込【ゆうちょ銀行からゆうちょ銀行へ】

記号 **10120**

□ 座番号 **61790761**

□ 座名 **C.R.I (シーアールアイ)**

■ 銀行振込【他行からゆうちょ銀行へ】

振込先 **ゆうちょ銀行 018 (ゼロイチハチ) 店**

□ 座番号 **6179076**

□ 座名 **C.R.I (シーアールアイ)**

* 銀行振込で送金いただく場合は、事務局から返信できるようにメール、ファックス、郵便などの方法で連絡先（住所など）をお教えください。「くりあんさブラジル通信」をお送りさせていただきます。

連絡先

〒259-1292 神奈川県平塚市北金目 4-1-1
東海大学国際学科気付 小貫大輔研究室

FAX: **0463 - 50 - 2407**

e-mail: **criinfo@cribrasil.org**

HP: **www.cribrasil.org**

Facebook: **www.facebook.com/cri.monteazul**

CRI 主催・共催のイベント

2020 年

3/20

お産サポートの会「ダーラルス」会議

(愛知県豊橋市にて)

6/13

チャリティ online ヨガ教室

今後の予定

7/25 (午後 8:00 ~ Zoom にて)

第一回ニューコロナ会議

(主催: 四国アントロポゾフィー・クライス)

コロナ・ショックで社会の変容が求められている今こそ、改めてシュタイナーの「社会論」について語りましょう。浅田豊さんという方が訳してくれた「二つのメモランダム」を手がかりに、社会の未来を模索します。

8/16 (午後 8:00 ~ Zoom にて)

CRI 年次総会

毎年 3 月の最後の週末に開催してきた CRI の総会ですが、今年はコロナのために延期となり、ようやく 8 月に開催の運びとなりました。オンラインで開催、ブラジルやヨーロッパに住んでいる仲間にも参加してもらう予定です。

2021 年

1/21 (午後 8:00 ~ Zoom にて)

チャリティ講演会

「ハグと友愛の時代がやってきた！」

CRI 運営委員の小貫大輔による毎年の「世界ハグデー」レクチャー、今年はモンチアズールへの寄付を募るチャリティイベントとして開催します。「自由・平等・友愛」の中の「友愛」がこれからの時代の課題となる！

その他

「UNESCO ユースセミナー」や「マルチカルチャーキャンプ」などの行事は、現在のところと実施できるかどうか、オンラインで実施するかどうかなど、検討中です。